

# 生物多様性なごや戦略

(中間案)

# 目 次

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 第1章 生物多様なごや戦略とは            | 1  |
| (1) 生物多様なごや戦略で伝えたいこと       | 3  |
| (2) 戦略策定の背景と手法             | 5  |
| (3) 戦略の全体構成                | 7  |
| 第2章 自然が創り、人が造ったなごや <歴史編>   | 9  |
| (1) 自然の摂理が創った大地といきもの       | 10 |
| ① 地球の変動が創った3つの地形           | 11 |
| ② 環境からみえるなごやの固有性           | 13 |
| ③ 3つの地形といきもの               | 15 |
| コラム：地形の変動と植物（東海丘陵要素）       | 17 |
| (2) 風土にあわせた人の暮らしの広がり       | 18 |
| ① 3つの地形に人が広がる              | 19 |
| ② 西部には田んぼや畑が広がる            | 21 |
| ③ 東部には里山が造られる              | 23 |
| ④ 中央部には町が発達する              | 25 |
| ⑤ 100年前のなごやの姿              | 27 |
| (3) 近代都市なごやの発展             | 32 |
| ① 近代都市としてのなごやの変貌           | 33 |
| ② 20世紀後半の急激な変化（まち）         | 35 |
| ③ 20世紀後半の急激な変化（暮らし）        | 37 |
| 第3章 現在のなごやの姿 <現状編>         | 39 |
| (1) 身近な隣人－なごやのいきものたち       | 40 |
| ① 今のなごやのいきものたち             | 41 |
| ② なごやの生物多様性マップ             | 43 |
| ③ 世界からみた、なごやの生物多様性         | 45 |
| コラム：都市における生物との共生、ふれあい事例、ほか | 47 |

|                          |    |
|--------------------------|----|
| (2) 快適な人の暮らしといきもの        | 48 |
| ① いきものにとって暮らしにくいまち       | 49 |
| ② 人の予想を越えて広がるいきものたち      | 51 |
| ③ いつまでも買えると思うな地球資源       | 53 |
| <b>コラム：なごやのものづくりのルーツ</b> | 57 |
| (3) いきものからいただく豊かな心       | 58 |
| ① いきものからいただく豊かな心         | 59 |
| <b>コラム： (未定)</b>         | 61 |
| (4) 社会情勢の変化のきざし          | 62 |
| ① 社会情勢の変化のきざし            | 63 |

## 第4章 望ましいなごやの姿 <展望編> 65

|                          |    |
|--------------------------|----|
| (1) こんなことを感じませんか？        | 66 |
| ① こんなことを感じませんか？～ひとの暮らし編～ | 67 |
| ② こんなことを感じませんか？～まちづくり編～  | 69 |
| <b>コラム： (未定)</b>         | 71 |
| (2) 100年後のなごやの姿          | 72 |
| ① 100年後のなごやの姿            | 73 |
| <b>コラム： (未定)</b>         | 75 |
| (3) 2050年に向けた3つの戦略       | 76 |
| ① 2050年に向けた「戦略」とは        | 77 |
| 戦略1：いのちのつながりを感じるひとづくり    | 79 |
| 戦略2：風土に適したくらしづくり         | 81 |
| 戦略3：自然の摂理に即したまちづくり       | 83 |
| ② すべてをつなぐ拠点づくり           | 85 |

## 第5章 もう、始まっています <実践編> 87

|                        |    |
|------------------------|----|
| (1) 身近な自然の保全・再生につながる動き | 89 |
| (2) 持続可能な利用につながる動き     | 91 |
| (3) 普及啓発と環境教育につながる動き   | 93 |
| (4) 情報・交流の拠点づくりにつながる動き | 95 |
| (5) 行政の動き              | 97 |

# 第1章 生物多様なごや戦略とは

## — この戦略からはじまるなごやの生物多様性 —

「むか〜しむかし、瀬戸からなごやをとおり知多半島にいたる丘陵地には、連続した緑豊かな森がありました。」

こんな想像をしてみてください。もし、今でも、その森が残っていたら？

「ごんぎつね」は、ふるさと半田から「モリゾーとキッコロ」に会いに海上<sup>かいしよ</sup>の森まで旅をしたのではないのでしょうか？そして、緑豊かな東山公園に、あるいは水辺の環境豊かな天白川に、ちょっと立ち寄ったかもしれません。

少し前の時代まで、なごやを含めたその周辺には、“豊かな自然（多様な自然）”が残っていました。便利で快適な暮らしを手に入れたことと引きかえに、私たちはそれらを失ってしまったのです。このままでは、今度は私たちが“暮らし”を失うことになります。そのようなことにならないように、未来につづく持続可能な自然と暮らしをつくるために、私たちの取り組む課題を示したのが「生物多様なごや戦略」です。

画像／イラスト

## 前 文

# (1) 生物多様性なごや戦略で伝えたいこと

## なぜ、生物多様性を保全するの？

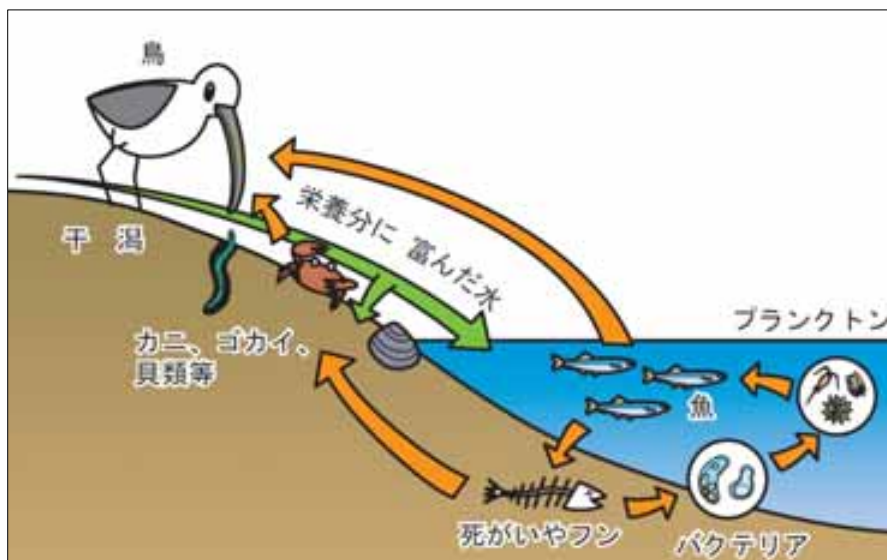
わたしたちは、さまざまな生きものに  
支えられています

- ・わたしたちは、生きるために、食べものだけではなく衣服や住まいの材料、薬の原料など、多くのものを自然の中からもらっています。
- ・たとえば、山にふった雨は川によって運ばれ、私たちが毎日利用する水になります。
- ・また、自然とのふれあいの場や、自然の中で感じるいやしの効果など、自然そのものからもさまざまな形で支えられています。



生きものは、互いにつながり  
をもって生きています

- ・すべての生きものは、互いにつながりや役割をもって生きています。
- ・つながりが切れてしまうと、他の生きものが困ってしまうだけでなく、わたしたちの食べものがとれなくなるなど、安心したくらしがなくなってしまうかもしれません。





## 大都市なごやにも関係があるの？

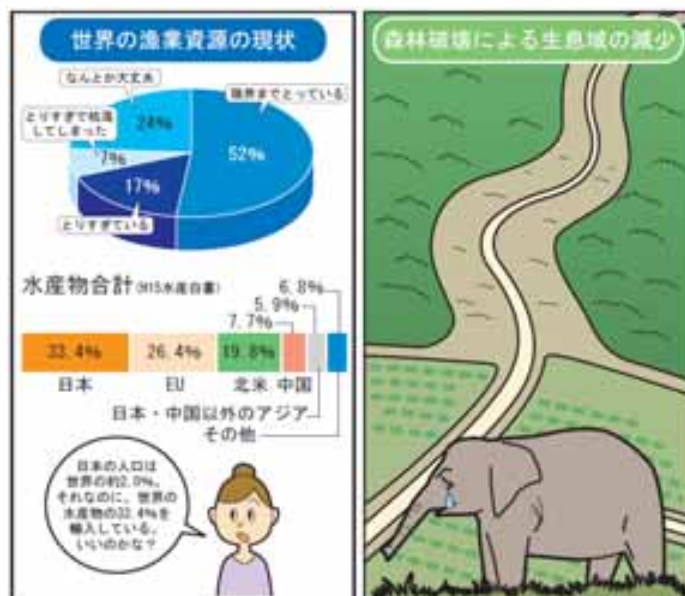
なごやは、世界中の生物多様性に依存しています

- ・現在、わたしたちは、外国から輸入される食品やエネルギー、つまり世界の生きものに多くを依存しています。
- ・毎日の食事、衣服や家具など身の回りにあるものの原材料や製品は、どこから来ているのか考えてみましょう。



私たちは、世界中の生物多様性に影響を与えています

- ・日本は、木材の約80%を海外から輸入していますが、輸入元の国々では、違法伐採や森林破壊などの問題が出てきています。
- ・魚など水産物のとりすぎによる枯渇や海の環境の破壊などが問題になっています。



## 生物多様性なごや戦略でとりくみましょう

### 身近な自然を保全・再生しましょう

●まずは、あしもとの“わずかに残るなごやの自然”にしっかり目を向け、大切にしましょう。

●身近な自然を大切にすることが、世界の生態系を保全することにつながります。



### 生活スタイルを転換しましょう

●現在のようにたくさんの“モノ”を消費する生活は、いつまでも続くものではありません。

●現在の生活を見直し、古来からの知恵や文化を生かして、自分たちの力でくらしを支えていきましょう。

## (2) 戦略策定の背景と手法

### 生物多様性をめぐる世界と日本、なごやの動き

- ・1992年開催の「地球サミット」において「生物多様性条約」が採択され、生物全般の保全に関する国際的な取り決めができました。日本は1993年にこの条約を締結しました。
- ・1995年には国家戦略が策定され、生物多様性に関する制度が整えられてきました。
- ・2010年、COP10（生物多様性条約第10回締約国会議）がなごやで開催されます。それに先立ち、なごやではこの戦略を策定しました。

| 年    | 世界                                                                     | 日本                                | なごや                                                                      |
|------|------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------|--------------------------------------------------------------------------|
| 1992 | 地球サミット(ブラジル・リオデジャネイロ)<br>「生物多様性条約」採択 (写真①)                             | 生物多様性条約署名<br>「種の保存法」制定            |                                                                          |
| 1993 | 生物多様性条約発効                                                              | 生物多様性条約締結                         |                                                                          |
| 1995 |                                                                        | 「生物多様性国家戦略」策定                     |                                                                          |
| 1996 |                                                                        |                                   | 「環境基本条例」制定<br>◆前文に「人と自然が共生することができる健全で恵み豊かな環境を保全」                         |
| 1999 | ExCOP1(コロンビア・カルタヘナ)<br>「カルタヘナ議定書」討議<br>◆遺伝子組換え生物の国境を越える移動について規制の必要性を決議 |                                   | 「藤前干潟最終処分場建設計画」断念 (写真②)<br>◆全国的な環境意識の高まり<br>「環境基本計画」策定<br>◆「環境首都なごや」の実現へ |
| 2000 | カルタヘナ議定書採択                                                             |                                   |                                                                          |
| 2001 |                                                                        |                                   | 藤前干潟「ラムサール条約」登録                                                          |
| 2002 | COP6(オランダ・ハーグ)<br>「2010年目標」採択<br>◆「2010年までに生物多様性の損失速度を顕著に減少させること」を目標   | 「自然再生推進法」制定<br>「(第二次)生物多様性国家戦略」策定 |                                                                          |
| 2003 |                                                                        | カルタヘナ議定書締結                        |                                                                          |
| 2004 |                                                                        | 「外来生物法」制定                         |                                                                          |
| 2005 | 国連「ミレニアム生態系評価(MA)」発表                                                   |                                   | 「愛・地球博」開催<br>◆市民の環境意識の高まり                                                |
| 2006 | COP8(ブラジル・クリチバ)<br>「生物多様性保全における企業の役割の重要性」を指摘                           |                                   | 「(第二次)環境基本計画」策定<br>◆「人と自然が共生する快適な都市」を明記                                  |
| 2007 |                                                                        | 「(第三次)生物多様性国家戦略」策定                |                                                                          |
| 2008 | COP9(ドイツ・ボン)<br>「COP10開催地なごや」決定 (写真③)                                  | 「生物多様性基本法」制定                      |                                                                          |
| 2010 | COP10(日本・なごや)                                                          |                                   | 「生物多様性なごや戦略」策定                                                           |

写真①



「どうやって直すのかわからないものを、こわしつづけるのはもうやめてください。」  
(12歳の少女、セヴァン・スズキのスピーチ)

写真②



守られた藤前干潟

写真③



COP10なごや決定時の関係者たち

COP: Conference of the Parties (締約国会議)

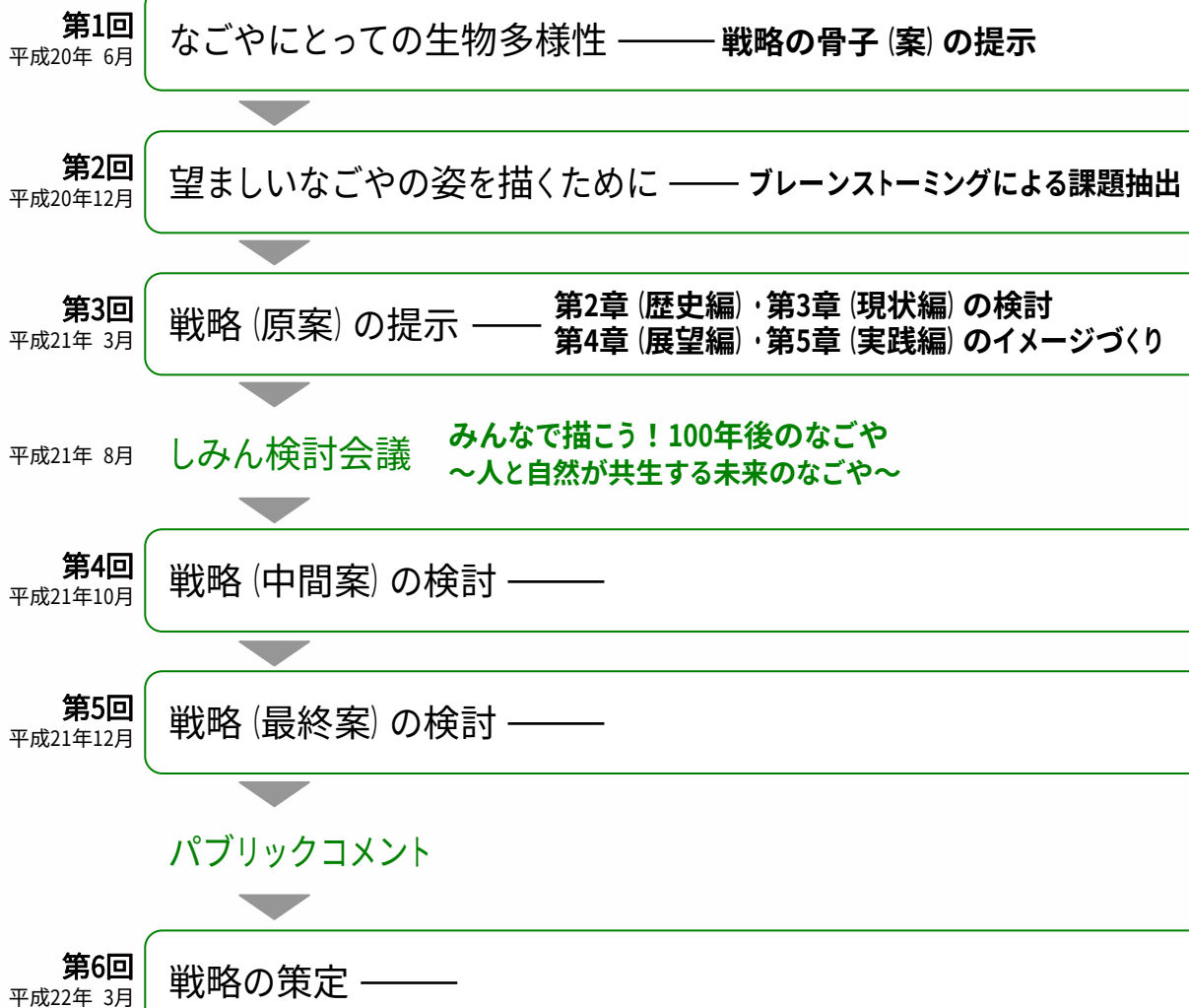
ExCOP: Extraordinary Meeting of the Conference of the Parties (特別締約国会議)

ラムサール条約: 特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約



## 生物多様なごや戦略策定会議

- ・この戦略は、「戦略策定会議」を通じ、市民との協働によって策定しました。
- ・「戦略策定会議」は、専門家や生物多様性アドバイザー、なごや環境大学のメンバー、NPOや地域の市民有志などで構成しました。



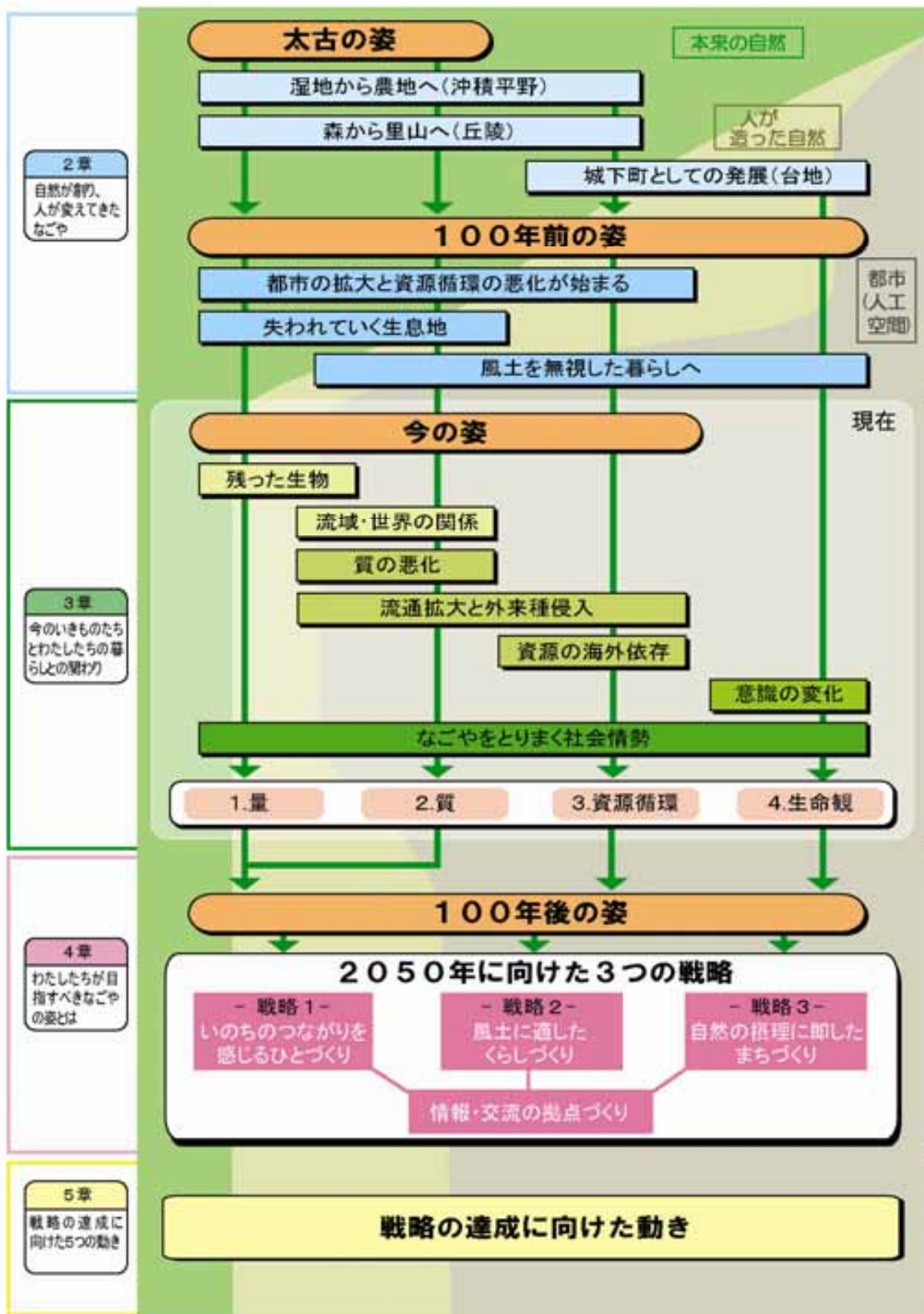
戦略策定会議 (H21.3)



しみん検討会議 (H21.8)

## (3) 戦略の全体構成

- ・「生物多様性なごや戦略」の構成は、下の図に示すとおりです。
- ・近代化の過程で失われてきたなごやの生物多様性を、3つの戦略により再生していきます。



※ベースの色分けは「本来の自然」、「人が造った自然」、「都市（人工空間）」の面積的な変化をあらわしています。

- ・「生物多様なごや戦略」では、なごやの歴史を振り返りながら（2・3章）、実現可能な未来像を描き（4章）、それに向けた具体的な取り組みを示します（5章）。

- ・堆積と隆起と浸食が3つの大地を創った
- ・地形や気候からなごやの環境の基礎が築かれる
- ・3つの地形と水がいきものを育む

- ・総論：3つの地形の特性を活かした人の暮らしの広がり
- ・湿地だった西部は、田んぼや畑として利用された
- ・森だった東部は、雑木林とため池の里山として利用された
- ・台地の上には、城下町が発達して文化が育まれた

- ・100年前のなごやでは、自然に合わせた人の暮らしが営まれていた

- ・都市区域の拡大と資源循環の崩壊を招く、近代的インフラ整備の始まり
- ・自然の摂理を超えた都市化により、失われていく生息地
- ・資源循環の崩壊が進み、風土を無視した暮らしへ

## 2章

自然が削り、  
人が変えてきた  
なごや

- ・今も残る生息地には、まだいきものたちが暮らしている
- ・今の3つの大地で、いきものたちはどうやって暮らしているのか
- ・今も残る生育空間は流域や世界ともつながっている

- ・人に都合のいいまちのつくりは、いきものにとって暮らしにくい
- ・流通網の拡大が、本来そこにはいないはずのいきものを運ぶ
- ・世界の生物多様性に影響を与えている私たちの暮らし

- ・いきものから感じる心の豊かさを失っていませんか？

- ・21世紀は着実に環境重視の社会にシフトしています

## 3章

今のいきものたち  
とわたしたちの暮らしとの関わり

- ・わたしたちの暮らしは、このままでいいのでしょうか？
- ・なごやのまちづくりは、このままでいいのでしょうか？

- ・しみん検討会議で100年後の夢の姿を描いていただきました

- ・夢の姿の実現のために、戦略を立てました

## 4章

わたしたちが目  
指すべきなごや  
の姿とは

- ・身近な自然の保全・再生につながる動き
- ・持続可能な利用につながる動き
- ・普及啓発と環境教育につながる動き
- ・情報・交流の拠点づくりにつながる動き
- ・行政の動き

## 5章

戦略の達成に  
向けた5つの動き



# 第2章

## 歴史編

# 自然が創り、 人が造ったなごや

— 自然が創り、人が変えてきたなごや —

太古のなごや  
＜イラスト＞

100年前のなごや  
＜イラスト＞

現在のなごや  
＜イラスト＞

## (1) 自然の摂理が創った大地といきもの

— 自然の摂理がなごやの大地を創り、いきものを育んだ —

いきものを育む基礎となるのが、大地と水です。  
自然の力が創り上げた、なごやの大地と水の違いは、そこにそれぞれ違  
ったいきものたちを育みました。

猿投神社の尾張国古図

※1830(天保元)年、千年前の古図として世に現れたもの

(出典: ●●●●●●)



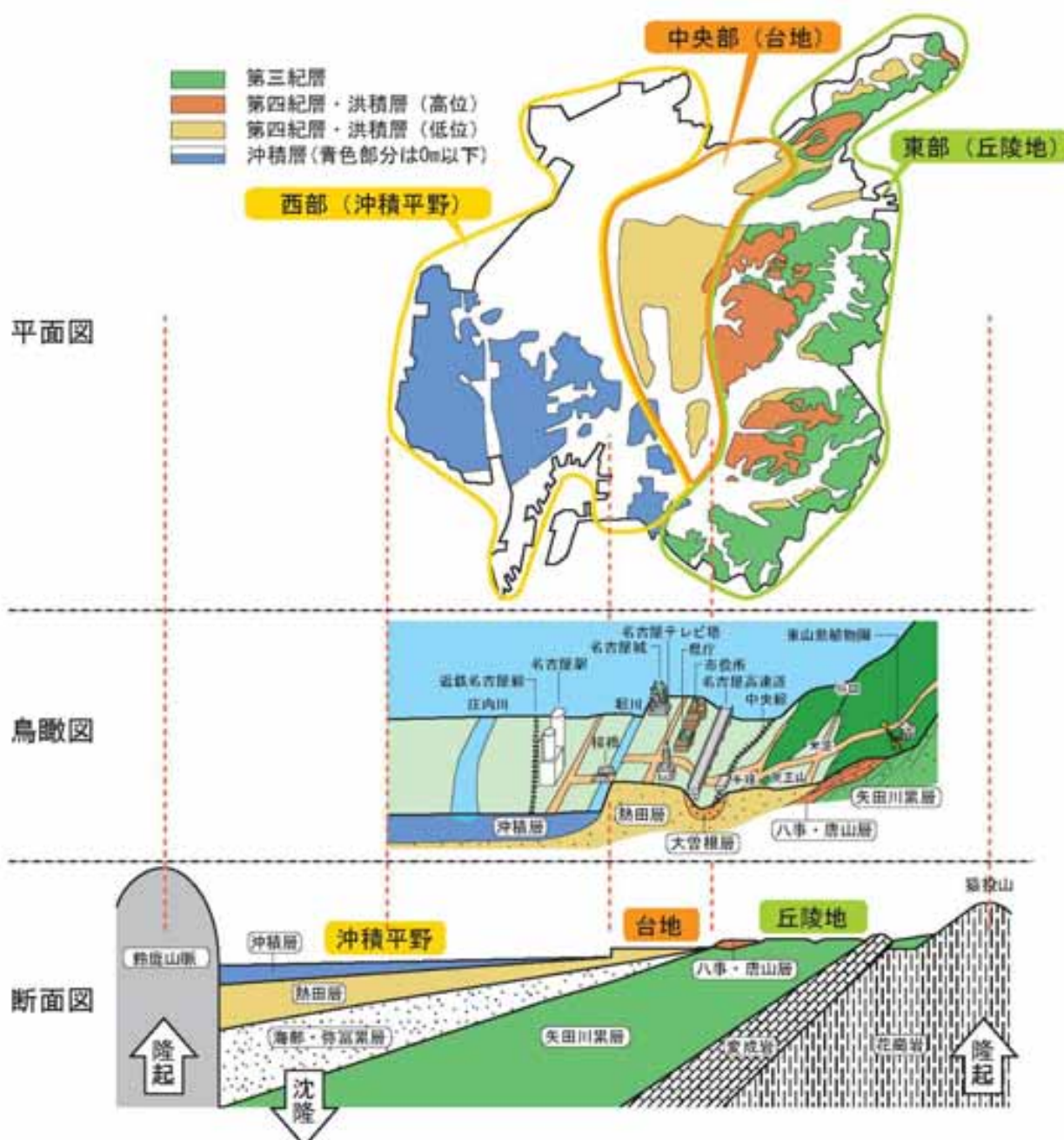
## ① 地球の変動が創った3つの地形

— 堆積と隆起と浸食が3つの地形を創った —

- 地形は、生態系を支える土台です。
- 地層はできた年代やそのでき方で、それぞれ性質が違ってきます。
- なごやの大地の成り立ちから、西部・中央部・東部の土地の違いを見てみましょう。

## なごやの地形

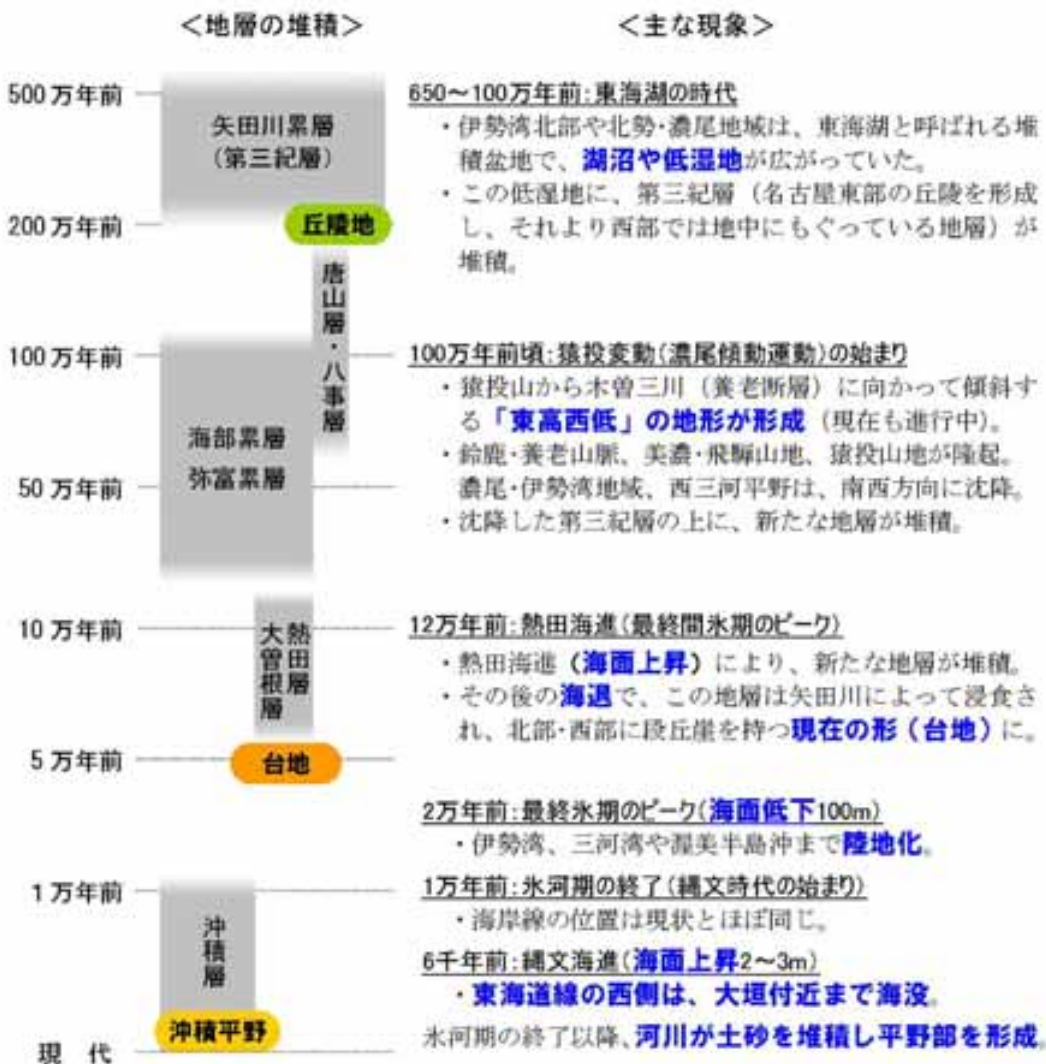
- ・なごやの地形は、大きく3つ（西部の沖積平野、中央部の台地、東部の丘陵地）にわけられます。
- ・これは、人類が誕生するはるか昔から続く、地形の形成運動によるものです。



出典：なごや環境ハンドブック-下巻(平成20年、「なごや環境大学」実行委員会)(一部加筆)  
名古屋の大地とその生い立ち-見てみよう、調べてみよう、郷土の地質遺産(2007年、村松憲一)

## (1) 自然の摂理が創った大地といきもの

## なごやの地形ができるまで



&lt;現在&gt;



&lt;東海湖の時代&gt;



&lt;熱田海進の時代&gt;



&lt;縄文海進の時代&gt;



出典:新修名古屋市の歴史第8巻

資料:東海化石研究会、日曜地学・東海の自然をたずねて

- なごやの地形は、長い年月をかけ、隆起や侵食・堆積などの作用を受けて創られました。
- その成り立ちの違いは、それぞれの土地の「起伏」・「質」・「水はけ」などの違いを生んでいます。
- 濃尾平野は、地表面も地下の地層も西に傾いています。それは濃尾傾動運動という大地の沈降・上昇運動によるものです。これは100万年ほど前から始まり、現在までつづいています。
- まず、かつての東海湖に堆積した地層が隆起し、東部の丘陵地帯となりました。
- その後、上昇した海の底に堆積した地層が、海面の低下で地上に現れ、中央部の台地を創りました。
- そして、低くなった西側には河川が流れ、その堆積物で平野ができました。



## ② 環境からみえるなごやの固有性

### — 地形や気候からなごやの環境の基礎が築かれる —

- 気候や地形などの基礎環境は、その土地のもつ固有性（潜在能力）を示しています。
- 気候や地形などは、その土地固有の植生を成立させる大きな要因です。

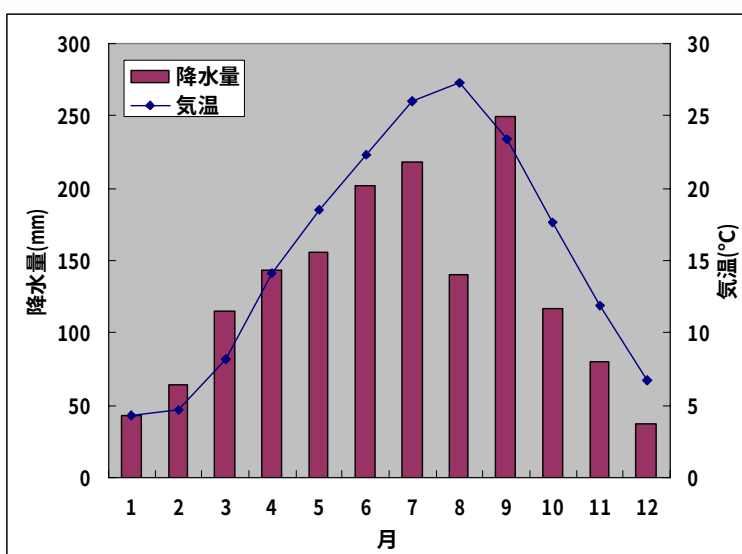
- ・約1万年位前（完新世）の地球の温暖化により、海面が上昇し、日本列島は大陸と切り離され、現在に近い環境になりました。
- ・日本は温暖湿潤気候です。季節風（モンスーン）の影響で、夏は高温多雨ですが冬は寒さが厳しく乾燥します。

### なごやの気候



東海地方の気候区分

出典：新修名古屋市史第八巻（平成20年、名古屋市）



なごやの温度、降水量の月別平年値

（名古屋地方気象台1971-2000年のデータより）

- ・冬季の降雪状況による気候分類（鈴木秀雄）によると、なごやは表日本気候区に属し、「常に雪が降らない」区域になります。なごやの北西側には「気圧傾度が強い時に雪が降る」準裏日本気候区になります。なお、裏日本気候区とは日本海側に代表される「必ず雪が降る」区域を示します。

### ◆気候トピック～伊吹おろし～◆

なごやの御器所台地には、冬の終わりに冷たい“伊吹おろし”が吹きつけます。昔はちょうどこの頃に木曽川河口でヨシの刈り取りが行われており、春間近の尾張の風物詩でもありました。

### 表層水と地下水の流れ方

濃尾平野は、濃尾傾動運動により地表面も地下の地層も西に傾いています。そのため、地上部の水（表層水）も地下水も西へかたよって流れていきます。なごやの植生は、地上部の水が西へ集まる特徴を反映しています。

#### 表層水



#### 地下水



## (1) 自然の摂理が創った大地といきもの

## なごやの植生

- ・植生の分布は、降水量と気温に密接な関係があります。
- ・冷涼な地域には針葉樹林、温暖な地域には常緑広葉樹林（照葉樹林）、その中間に落葉広葉樹林（夏緑樹林）がみられます。
- ・なごやを含む東海地域は、西日本のシイ・カシを中心とする常緑広葉樹林と、東日本のブナに代表する落葉広葉樹林の境界近くに位置し、場所によっては両方の要素が混在する重要な地域です。



| 凡 例                                                                                            |              |
|------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------|
| <span style="display:inline-block; width:15px; height:15px; background-color:#008000;"></span> | 亜高山(亜寒帯)針葉樹林 |
| <span style="display:inline-block; width:15px; height:15px; background-color:#00b050;"></span> | 落葉広葉樹林       |
| <span style="display:inline-block; width:15px; height:15px; background-color:#90ee90;"></span> | 常緑広葉樹林       |
| <span style="display:inline-block; width:15px; height:15px; background-color:#c1e1c1;"></span> | モミ・ツガ林       |

安田喜憲「環境考古学事始」より作成

※なごやを含む東海地域は、弥生時代前期の稲作伝播の範囲や、土器様式のちがいなどをしめす境界にもあたり、文化的な面でも重要な場所です。

東海地方の植生区分

- なごやは、気候区分で言えば暖温帯に位置し、森林が生育するのに十分な降水量です。
- なごやは、地上の表層水も地下水も西へかたよって流れています。
- 東部はなだらかな丘陵で、ここに降った雨の一部は大地にしみ込み、地下水となります。
- 中央部は平坦な台地ですが、いくつかに分かれ小さな谷も入り込む複雑な地形です。
- 西部は標高の低い平野で、地下水がしみ出しやすく、河川の氾濫原\*になっていました。
- なごやは、常緑広葉樹林と落葉広葉樹林の接点近くに位置する貴重な場所です。

\*氾濫原：河川の下流域に位置し、洪水時に水が氾濫するような場所のことです。そのため、水の管理がむずかしい土地ですが、逆に水が豊富であるともいえます。また、氾濫時に上流から土砂や栄養分が流れ込むために、肥沃な土壌でもあります。このような特性から、農業、特に水田に適した土地なのです。

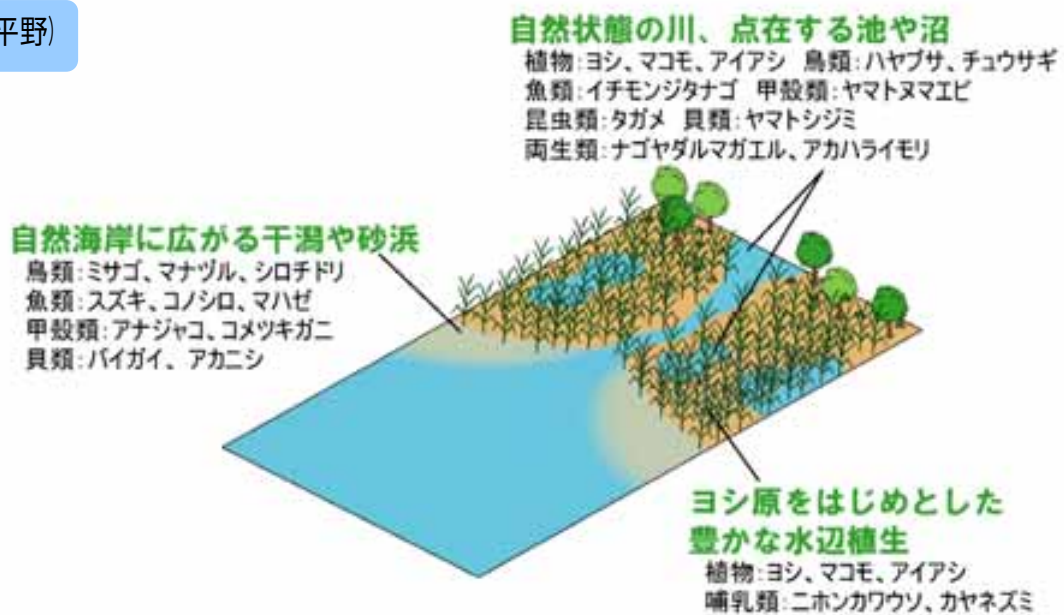
### ③ 3つの地形といきもの

#### — 3つの地形と水がいきものを育む —

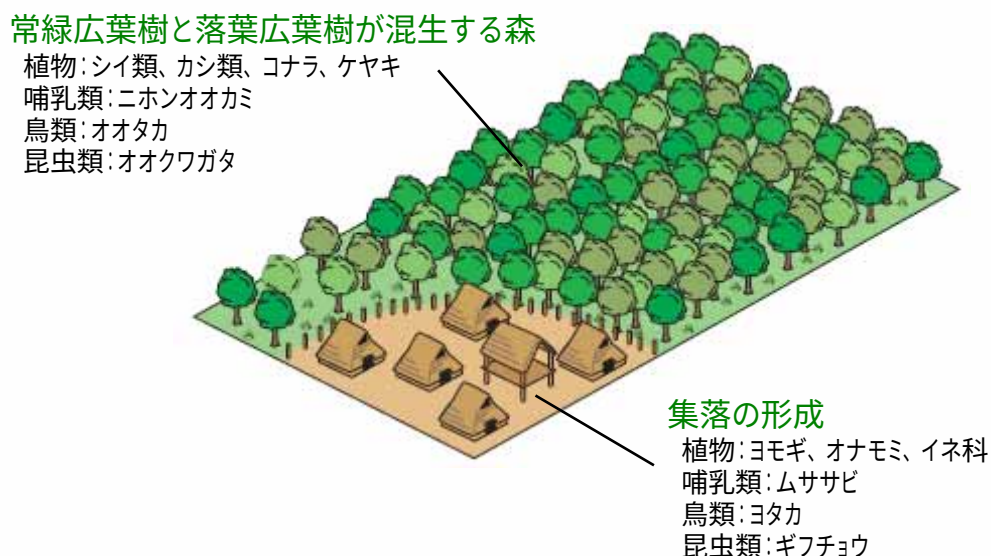
- 太古のなごやでは、自然が創った地形と水によって、3つの地形にそれぞれの生態系が育まれていました。
- 人の手がほとんど入っていなかった時代の、なごやのいきもの達の姿を想像してみましょう。

太古のなごや (自然環境に人の手がほとんど入っていなかった時代。おおむね弥生時代前期頃)

#### 西部 (沖積平野)



#### 中央部 (台地)





## (1) 自然の摂理が創った大地といきもの

## 東部（丘陵地）

## 常緑広葉樹の森

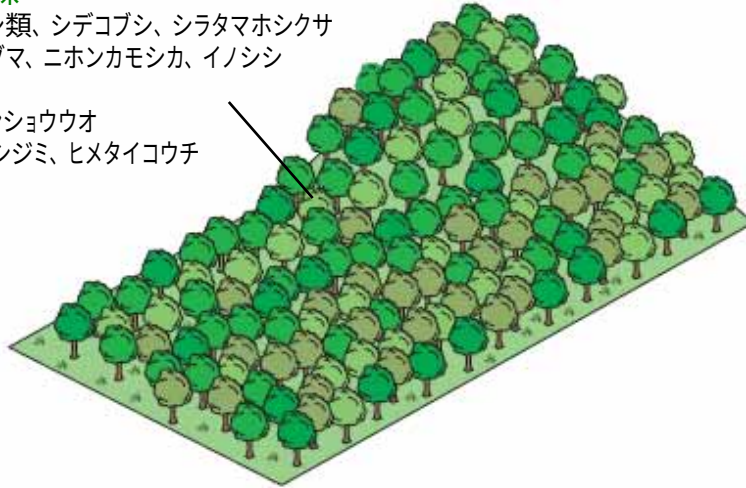
植物：シイ類、カシ類、シデコブシ、シラタマホシクサ

哺乳類：ツキノワグマ、ニホンカモシカ、イノシシ

鳥類：ハヤブサ

両生類：カスミサンショウウオ

昆虫類：ムラサキシジミ、ヒメタイコウチ



資料：安田喜憲. 環境考古学事始. 洋泉社MC新書. 2007

安田喜憲. 森の日本文化. 新思案社. 1996

自然史編纂調査会. 東海の自然史. 財団法人東海財団. 1990

新修名古屋市史第8巻

- 西部には、湿地や干潟、湖沼の生態系が形成されていたでしょう。
- 中央部の台地の上には、シイやカシなどの常緑広葉樹とコナラやケヤキなどの落葉広葉樹の森が広がり、人が暮らし始めていたでしょう。
- 東部の丘陵地には、シイやカシなどの常緑広葉樹の森が広がり、崖下などの小さな湿地には、シデコブシやシラタマホシクサなど氷河期を生き残った植物がみられたでしょう。
- 今でも、中央部の熱田神宮や東部の湿地には、太古の時代の自然の姿がわずかに残されています。

地形の変動と植物（東海丘陵要素）

## (2) 風土にあわせた人の暮らしの広がり

— 風土に合わせて広がった人の暮らしが、いきものを変えていく —

自然が創った3つの地形の違いを上手く利用しながら、自然に合わせた人の暮らしが広がっていきました。

# ① 3つの地形に人が広がる

## — 総論：3つの地形の特性を活かした人の暮らしの広がり —

- 今のなごやの自然やいきものは、人の手が加わって形成されたものです。
- 生活圏の拡大とともに、必要な生物資源も増えました。
- ここでは、その過程を見ていきましょう。

### 人の広がり

#### 縄文～古墳時代



- ・縄文時代には、中央部の台地上に集落が形成されました。
- ・古墳時代には東部の丘陵地への進出が始まりました。

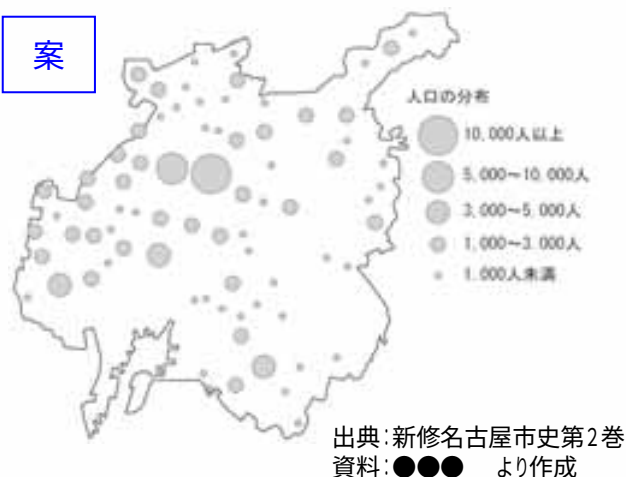
#### 古代中世



- ・中央部の台地は、熱田神宮を中心に栄えました。
- ・西部の沖積平野にも人々の暮らしは広がっていきました。
- ・東部の丘陵地は、里山として利用されていきます。

#### 江戸時代

案



- ・中央部の台地は、名古屋城の城下町として、発達していきました。
- ・西部の沖積平野や東部の丘陵地は、主に農地として開発が進められていきました。



## (2) 風土にあわせた人の暮らしの広がり

## なごやのまちができるまで (徐々に進んだ自然の改変)

|      | 西部（沖積平野）                                                    | 中央部（台地）                             | 東部（丘陵地）                                                   |
|------|-------------------------------------------------------------|-------------------------------------|-----------------------------------------------------------|
| 縄文時代 | ・ 浅海や低湿地に土砂が堆積<br>→ 沖積平野を形成                                 | ・ 台地上に集落形成                          |                                                           |
| 弥生時代 | ・ 沖積平野（主に東海道線の東）<br>でも集落形成がはじまる<br>→ 低湿地開発の始まり              |                                     |                                                           |
| 古墳時代 |                                                             |                                     | ・ 丘陵地への進出ははじまる<br>・ 陶器生産の開始<br>→ 森林伐採のはじまり                |
| 古代中世 | ・ 沖積平野の各所に荘園形成<br>・ 洪水の頻発（11～12世紀）<br>→ 河道の活発化<br>→ 自然堤防の発達 |                                     | ・ 陶器生産は奥地に展開<br>→ 黒山の「里山」化<br>森林伐採の拡大                     |
| 江戸時代 | ・ 庄内川の洪水頻発<br>→ 河川改修<br>・ 河口での土砂堆積<br>→ 干拓による新田開発           | ・ 「城下町」の形成                          | ・ 里山のアカマツ疎林化<br>（伐採→二次林化と疎林化）<br>・ ため池の創出<br>→ ため池によるかんがい |
| 明治中期 | ・ 後背湿地…水田<br>自然堤防…集落、畑                                      | ・ 名古屋台・熱田台…市街地<br>御器所台…畑<br>谷底平野…水田 | ・ 東部丘陵…松林                                                 |

→ P27～28参照

※図中矢印は、人の増加・拡散状況を示す

- 人間による自然の改変は、太古より始まりました。
- 3つの地形や水の流れの違いを上手く利用しながら、人の生活圏が拡大していきます。
- 森林の木材を利用しながら、干拓やため池灌漑で農地を拡大し、増加する人口を支えました。
- 市場には様々な魚や野菜が流通し、十分な食糧生産がありました。

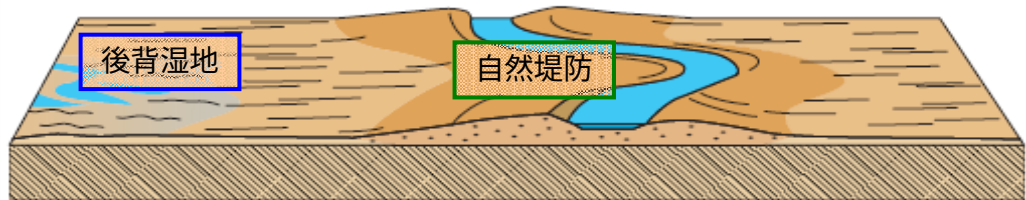
## ② 西部には田んぼや畑が広がる

— 湿地だった西部は、田んぼや畑として利用された —

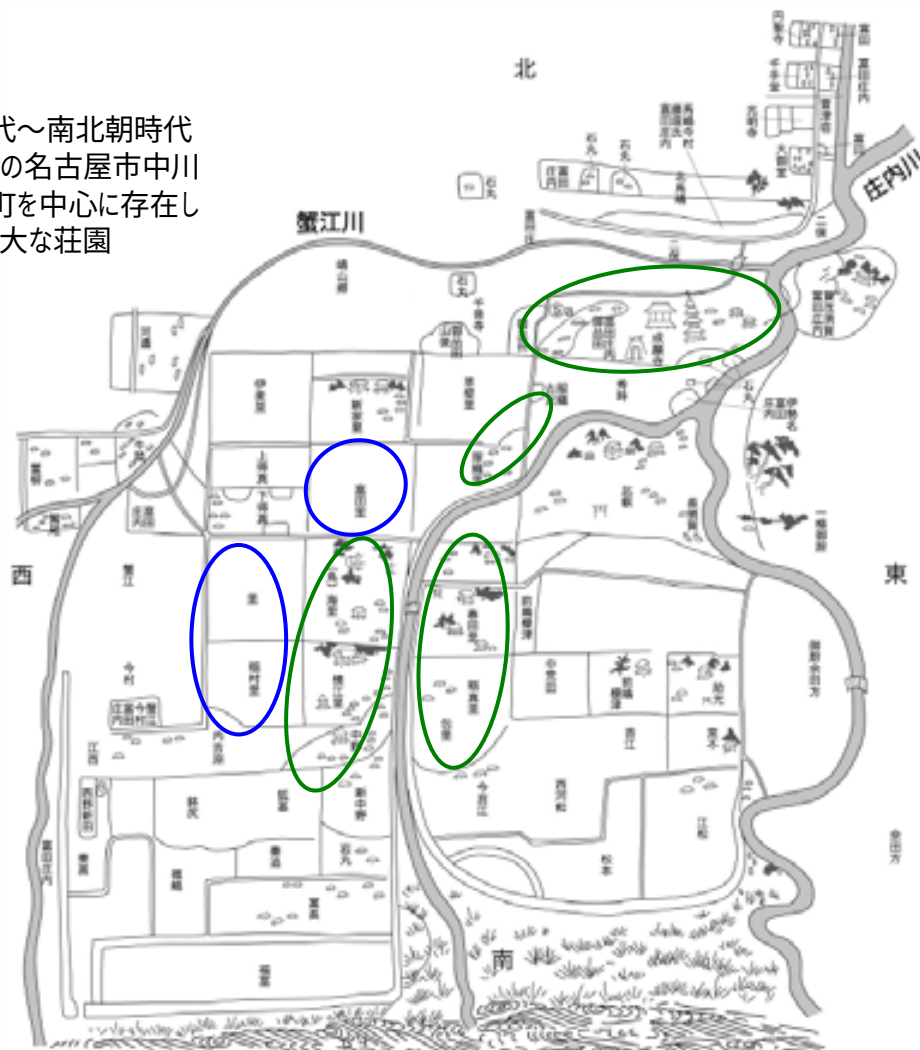
- 西部に広がる低湿地は、豊富な水を利用して、農地として使われました。
- ここでは米や野菜が生産されていました。

### 西部の地形を活かした人の暮らし

- ・上流から運ばれてきた土砂は、川の両わきに堆積して「自然堤防」をつくります。
- ・川から離れた場所は河床よりも低くなり、「後背湿地」とよばれる湿地になります。
- ・鎌倉時代の荘園(富田荘)をみると、地形を活かした暮らしが営まれていたようすをうかがうことができます。

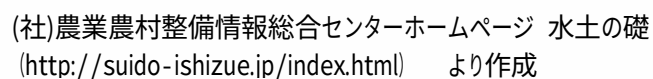


富田荘  
鎌倉時代～南北朝時代に、  
現在の名古屋市中川区  
富田町を中心に存在し  
ていた広大な荘園



(社)農業農村整備情報総合センターホームページ 水土の礎 (<http://suido-ishizue.jp/index.html>)、  
新修 名古屋市史 第一巻 旧石器から平安時代(●年、名古屋市) より作成

- ・江戸時代になると、広く新田開発(干拓)が進められました。
- ・生物のすみかも、干潟から農地へと変化しました。



- 22

### ③ 東部には里山が造られる

— 森だった東部は、雑木林とため池の里山として利用された —

- 東部の丘陵では、河川から水を引くことが難しいため、ため池灌漑が進められました。
- 森林に継続的に人手が加わり、「里山」が形成されていきました。

#### 森林資源利用のはじまり

古墳時代の  
窯のようす



資料：名古屋市博物館  
おもしろやきもの展  
ハンドブック、広木詔  
三.里山の生態学

- ・古墳時代になると、東部の丘陵地では陶器（土器）生産が始まりました。
- ・縄文土器・弥生土器は、焚き火の中に入れて焼かれましたが、古墳時代の土器は、山の斜面を掘ってつくる「あな窯」で焼かれました。
- ・窯の出現によって、燃料の薪がたくさん必要になり、これまで以上に樹木が伐採されるようになりました。

#### 江戸時代における森林伐採

- ・江戸時代の絵図をみると、寺のまわりや池の背後の丘陵地にマツがまばらに描かれています。
- ・マツは伐採した跡地に最初に生える樹木なので、この図から、広い範囲で森林が伐採されたようすをうかがうことができます。

1840年ごろの名東区蓮教寺、牧の大池

出典：目で見える愛知の江戸時代 中（昭和61年、国書刊行会編）

#### 丘陵地のため池



名東区高針のため池分布

資料（新修名古屋市史 第四巻、YAHOO地図）より作成

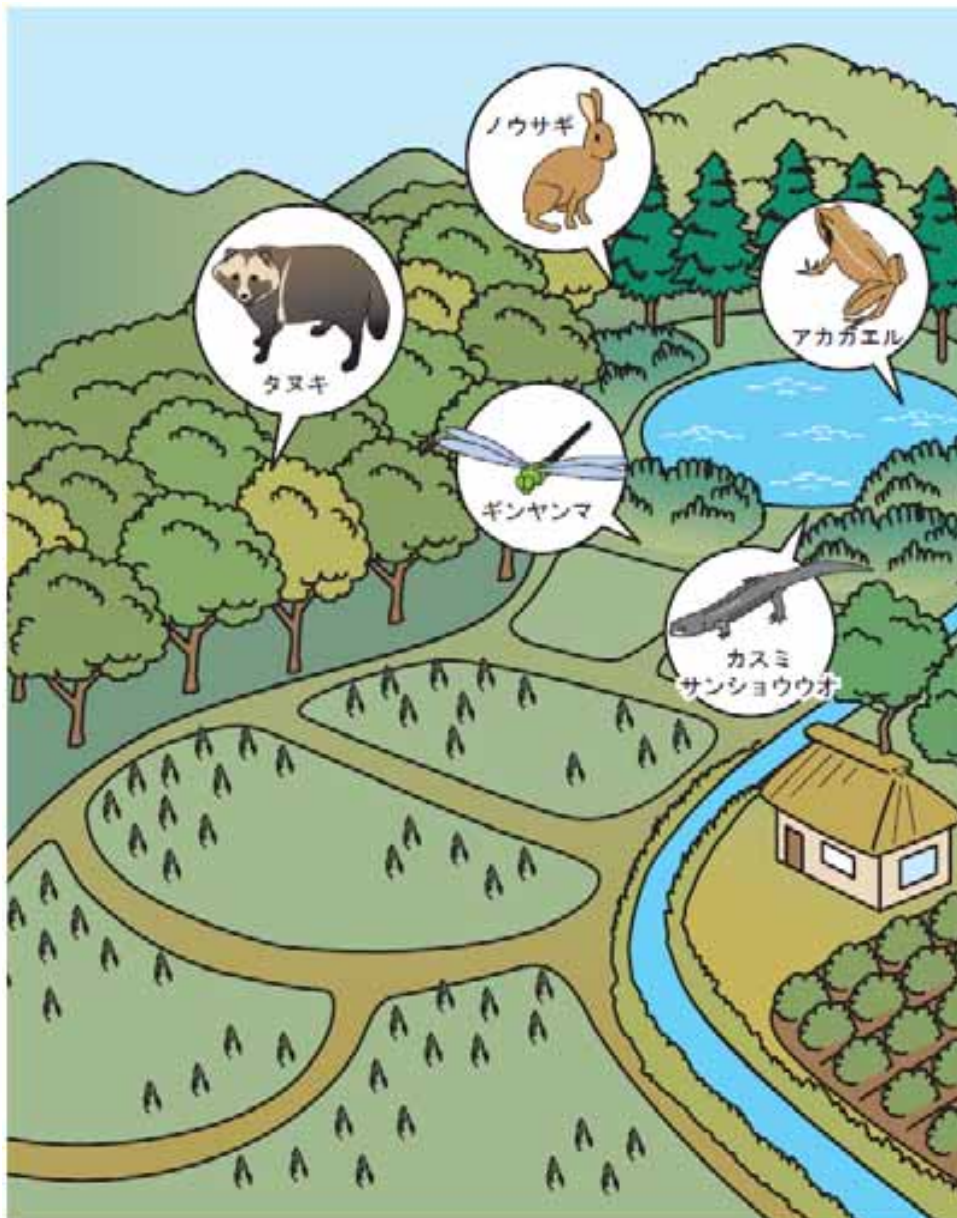
- ・東部の丘陵地では、農業用水が不足するため、多くのため池がつくられました。
- ・現在の名東区高針は、むかし高墾とよばれ、36のため池があったとされています。「高」「墾」という漢字から、「開墾した高い場所」であったことがわかります。



## (2) 風土にあわせた人の暮らしの広がり

## 里山の生活

- ・江戸時代の里山の想像図です。
- ・里山では、農地とため池、林がセットになっていました。
- ・これらの環境は、多くの生物のすみかになっていました。



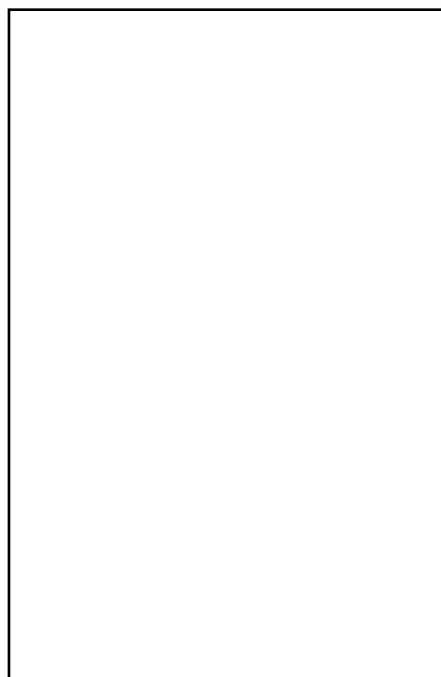
- 丘陵地に暮らす人々は、水を確保するためにため池を造り、稲作や畑作を行っていました。
- 森の樹木や草は燃料や肥料として使われ、次第に雑木林となりました。
- こうして、農地とため池、樹林地で構成される「里山」の暮らしが営まれていました。

## ④ 中央部には町が発達する

— 台地の上には、城下町が発達して文化が育まれた —

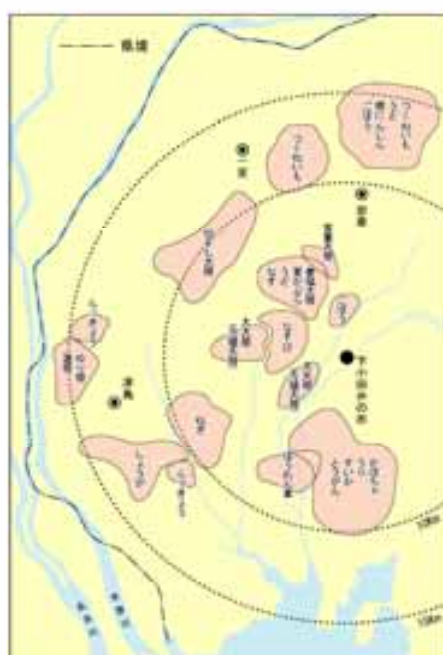
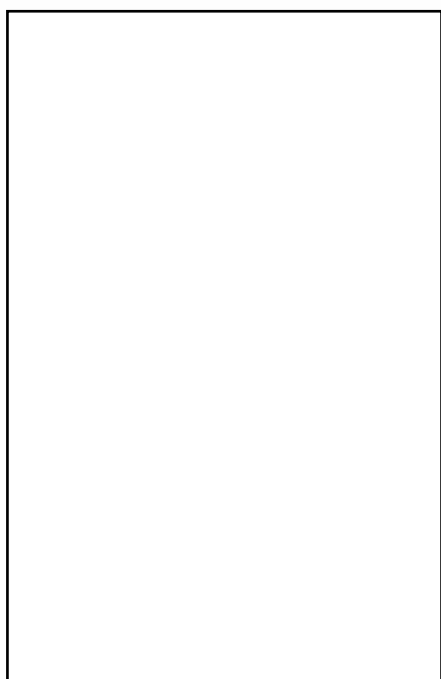
- 中央部に広がるなだらかな高台には、古くから集落が発達していました。
- そして、名古屋城の築城により、城下町が築かれたことで、消費と文化の中心地となりました。

### 城下町の形成



・400年前、中央部の台地には、清須越によって、名古屋城を中心とする都市がつけられました。

### 城下町を支えた食の供給



・熱田には魚市場、下小田井には青物市場がありました。

・下小田井には、西部だけでなく、尾張全域から野菜が集まっていました。関東や四国から届くものもあったそうです。

出典：歴史群像シリーズ 城と城下町3 名古屋 (2008年、学習研究社)  
 風雪三百七十年 (昭和55年、名古屋青果物商業協同組合)  
 図説 名古屋圏—その構造と問題— (1993年、名古屋都市圏研究会編)

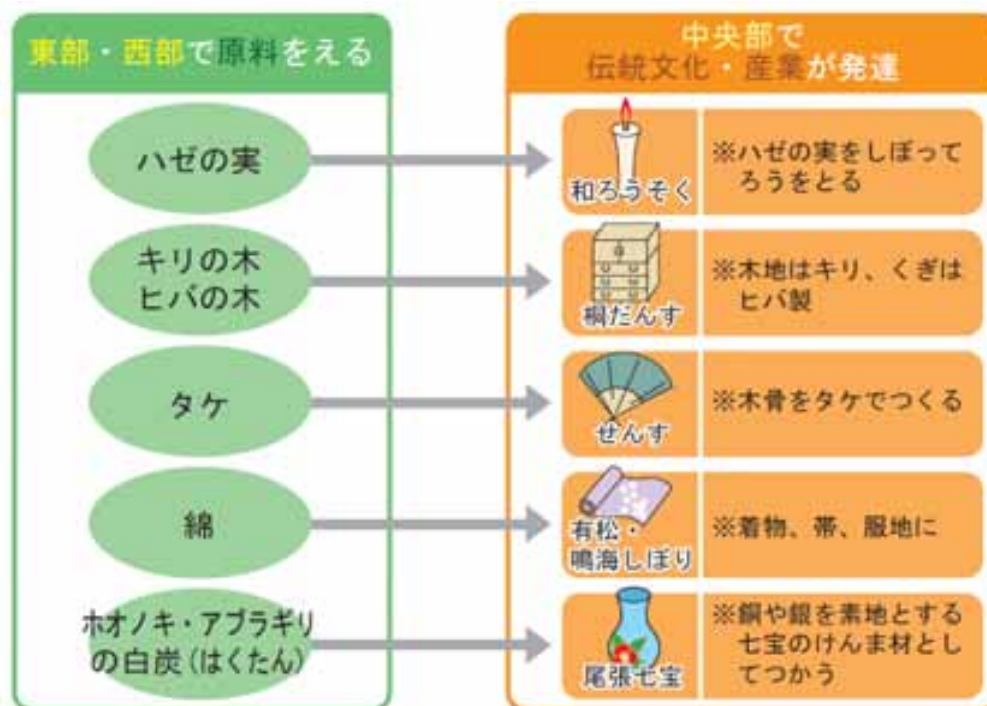
## (2) 風土にあわせた人の暮らしの広がり

## 城下町を支えた木材の供給

- ・熱田区白鳥には大きな貯木場があり、木曽で切られた木材は、木曽川をくだり、伊勢湾を横切って熱田に運ばれてきました。

## 伝統文化と産業

- ・おもに東部や西部から得られる自然資源を利用して、さまざまな伝統文化や産業が生まれました。



資料：あいちの伝統工芸品HP、ホームタウンホームページ中部地方HP

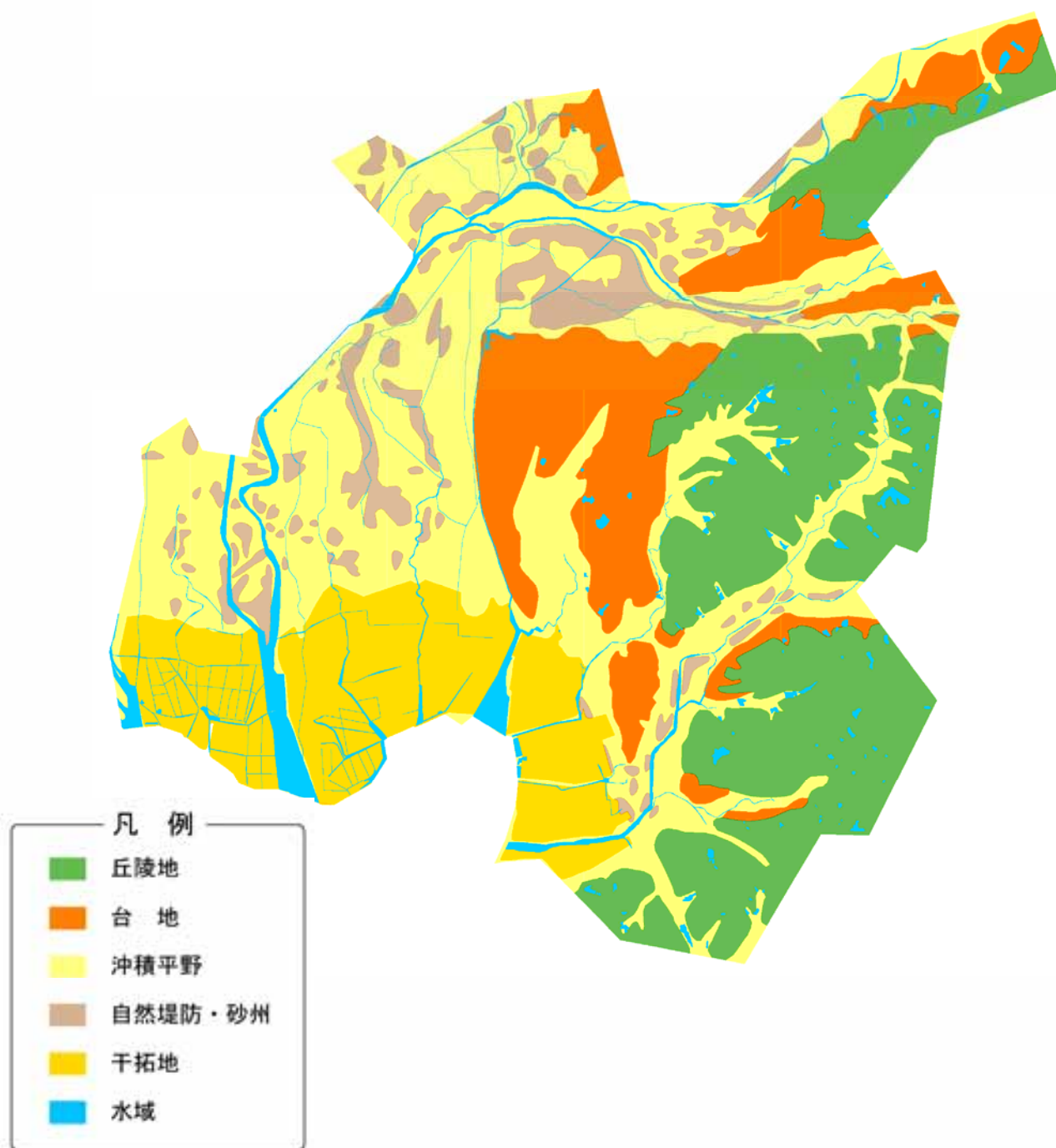
- 中央部の台地は、古くから集落が発達していました。
- そして、西部と東部で生産される食料や資源を利用した、町の暮らしが築かれていきます。
- 名古屋城の城下町として、現在に通じる様々な伝統文化が花開きました。

## ⑤ 100年前のなごやの姿

— 100年前のなごやでは、自然に合わせた人の暮らしが営まれていた —

- なごやの生物多様性は、人と自然が創りあげてきたものです。
- 100年前のなごやの土地利用をみてみましょう。

大きく3つに分かれる地形



出典：明治・昭和東海都市地図（1996年、柏書房株式会社）

庄内川治水地形分類図（下流）改訂版（平成16年、国土交通省中部地方整備局庄内川河川事務所）

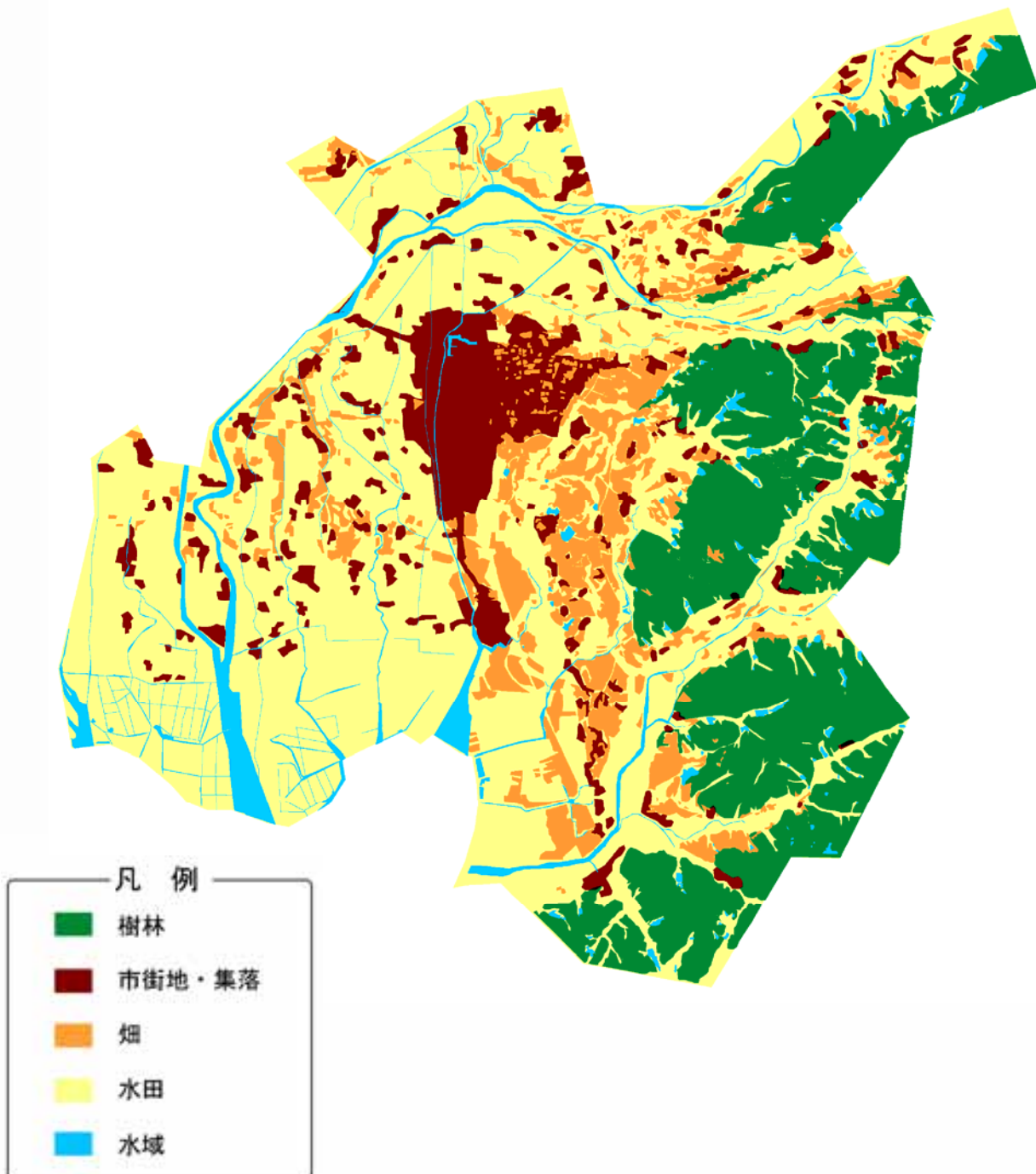


## (2) 風土にあわせた人の暮らしの広がり

## 地形に合わせた土地利用

100年前の土地利用と地形を見比べると・・・

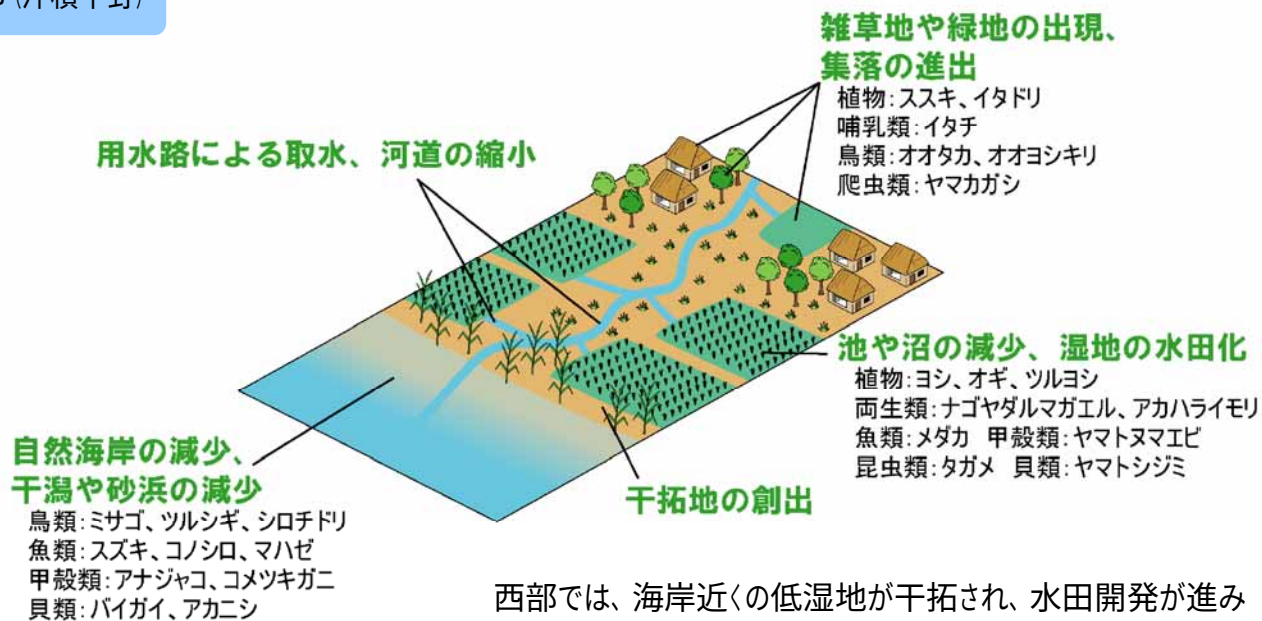
- ・西部の沖積平野では、自然堤防は集落や畑として利用され、その他の地域は水田として利用されていました。
- ・中央部の台地では、西側は市街地、東側は畑として利用され、低地部は水田として利用されていました。
- ・東部の丘陵地では、大部分が樹林で、林縁はため池や集落として利用され、低地部は水田として利用されていました。



明治・昭和東海都市地図 (1996年、柏書房株式会社) より作成

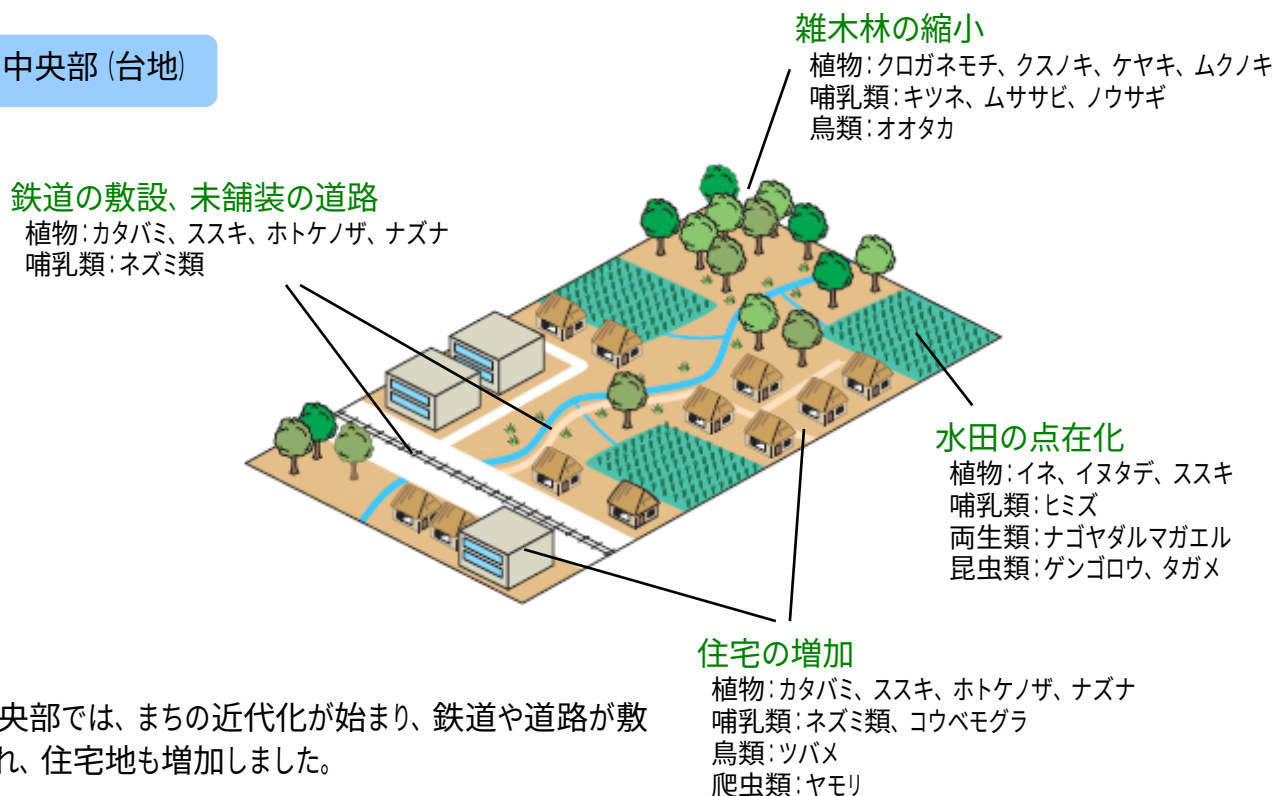
## 100年前のなごや

### 西部 (沖積平野)



西部では、海岸近くの低湿地が干拓され、水田開発が進みました。  
 水田はいきものにとって新たなすみかとなりました。

### 中央部 (台地)



中央部では、まちの近代化が始まり、鉄道や道路が敷かれ、住宅地も増加しました。

## (2) 風土にあわせた人の暮らしの広がり

## 東部(丘陵地)

## 湧水湿地の減少

植物：シデコブシ、ハナノキ、シラタマホシクサ  
 両生類：ナゴヤダルマガエル、カスミサンショウウオ  
 昆虫類：ゲンゴロウ、タガメ、ヒメタイコウチ

## 樹林の里山林化

植物：シイ類、カン類  
 哺乳類：ニホンリス、ムササビ  
 鳥類：ヨタカ、コノハズク、カッコウ

## 農村・集落の発達

植物：クロガネモチ、アベマキ、ススキ  
 哺乳類：タヌキ、イタチ、ノウサギ、ネズミ類

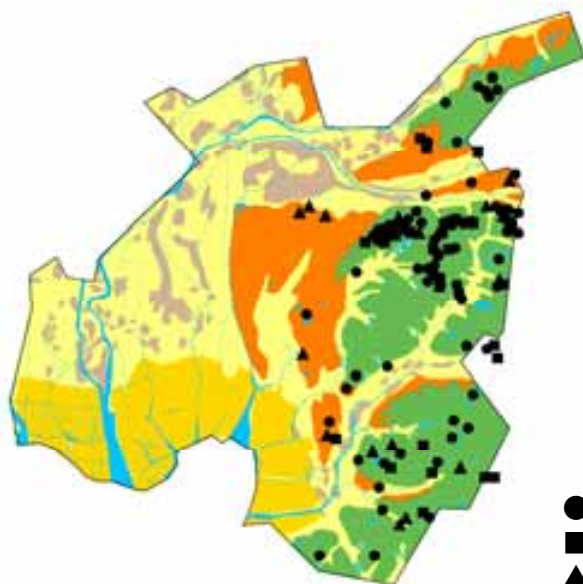
## ため池の創出

植物：ヌマガヤ、ヨシ、ヒメガマ、ガガブタ  
 両生類：ナゴヤダルマガエル、アカハライモリ  
 魚類：イチモンジタナゴ、メダカ  
 昆虫類：ゲンゴロウ、タガメ

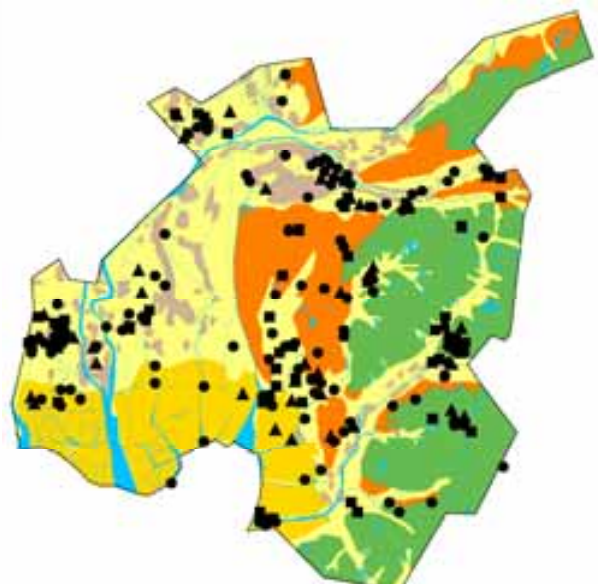
東部では、農地—ため池—樹林がセットになった「里山」が形成されていました。  
 人の利用・管理といきものの生活がバランスよく維持されていました。

## 地名と地形を比べてみると・・・

- ・地名から、その土地がもつ地形や性質を知ることができます。
- ・「台」や「丘」がつく地名は、台地や丘陵地に集中しています。
- ・「田」がつく地名は、西部の沖積平野や、中央部・東部の低地に集中しています。



「台」「丘」がつく地名



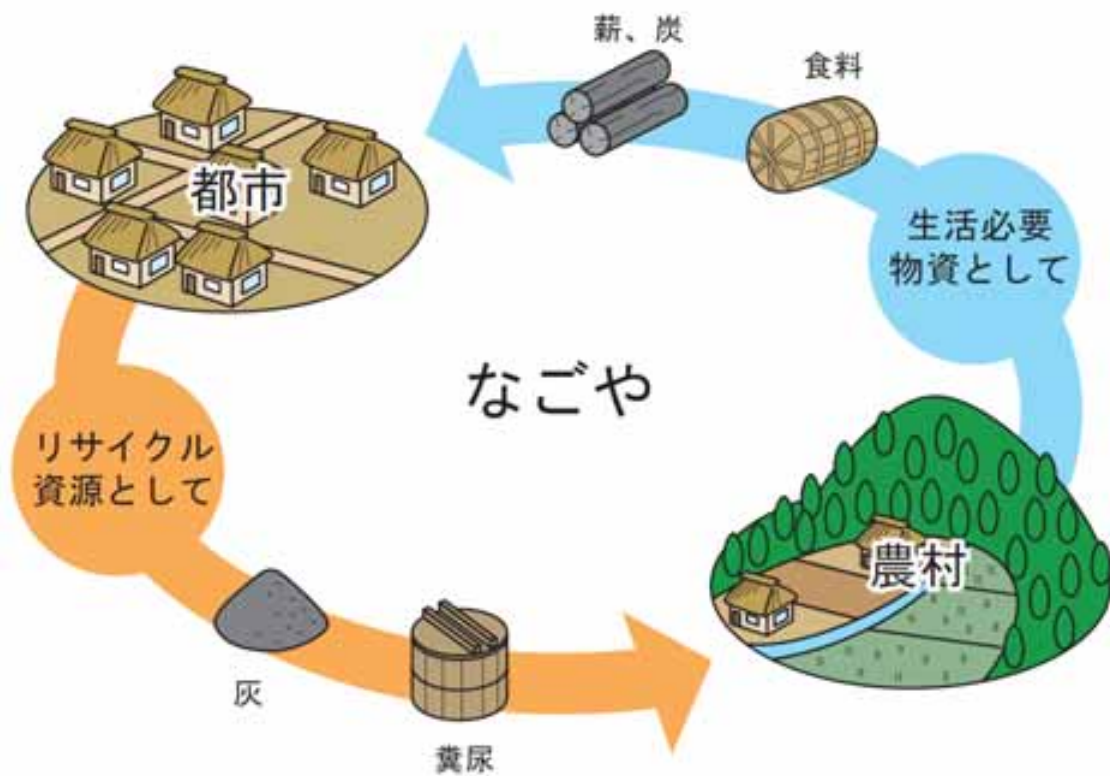
「田」がつく地名

●：地名  
 ■：バス停  
 ▲：学校



## 100年前の暮らしと資源循環

- ・都市と農村には、つながりがありました。
- ・モノが、無駄なく利用されるしくみがありました。



- 有史以来、自然の改変は徐々に進行してきましたが、土地の利用は自然の条件に合わせたものでした。
- 人の暮らしに必要な燃料や食料は、流域圏内から供給され、生物資源の循環ができていました。
- 100年前のなごやでは、自然に合わせた人の暮らしが営まれていたと考えることができるでしょう。



### (3) 近代都市なごやの発展

— 近代化とともに、まちや人の暮らしが、風土から離れていく —

近代化を象徴する写真を並べる  
(明治～時代)

# ① 近代都市としてのなごやの変貌

—都市区域の拡大と資源循環の崩壊を招く、近代的インフラ整備の始まり—

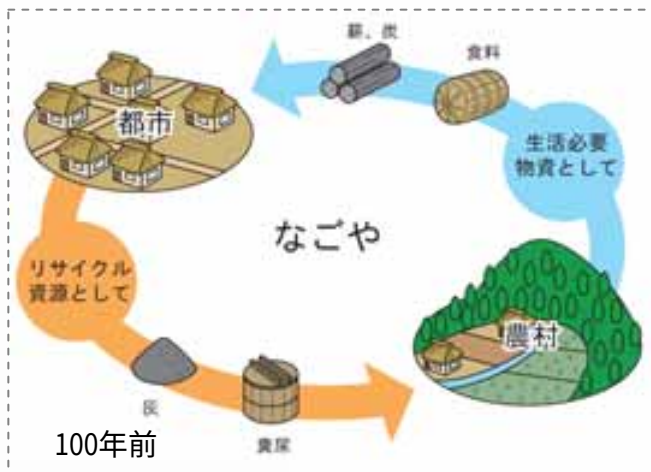
- 明治以降、本格的に近代的なまちづくりがはじまり、今のなごやのまちができました。
- ここでは、その様子を見てみましょう。

## 近代都市への歩み (19世紀末～20世紀前半)

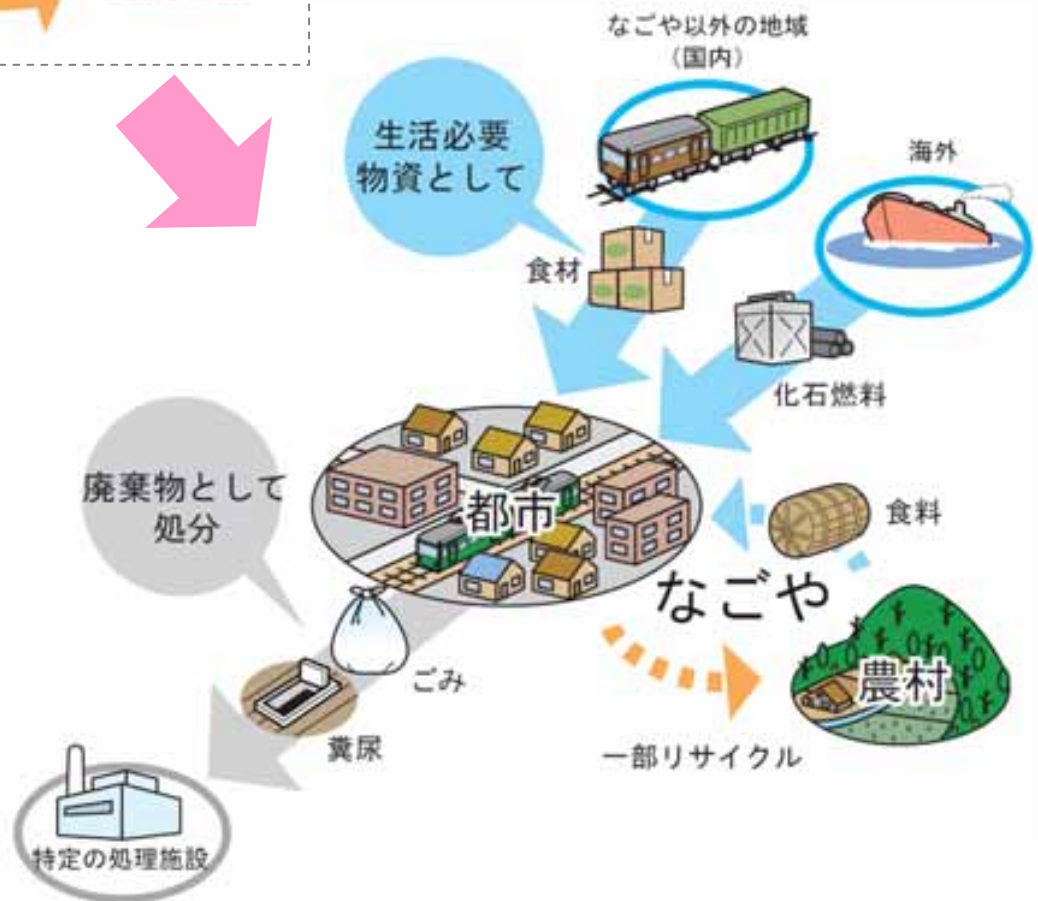
|    | 都市の近代化と戦時体制                                                                                                                                            | 築港と運河の開削                                                     | 区画整理と公園整備                                                                                                                               | 人口    |
|----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|
| 明治 | '86 名古屋停車場（笹島）開設<br>'87 広小路に柳の街路樹<br>'89 名古屋市制施行（人口16万）<br>市内に電灯がともる<br>東海道線全通<br>'98 市電開通（笹島～栄間）<br><b>交通インフラの曙</b>                                   | 土砂堆積による熱田湊の遠浅化<br>↓<br>築港工事に着手（'96）<br>↓<br>'07 名古屋港開港       | '05 耕地整理はじまる<br>'09 鶴舞公園開園<br>最初の総合公園<br>'14 童謡「ふるさと」<br>この頃、第1次里山再生運動が全国的に起こる                                                          | 16万人  |
|    | '07 熱田町を合併（人口35万）<br>'10 上水道着工（→'14給水）<br>'11 下水道着工（→'23竣工）<br>'12 し尿汲み取り市営開始<br>'15 八事火葬場開設<br>'17 ごみ焼却所開設<br><b>衛生インフラの曙</b>                         | '10 新堀川開削<br>川沿低湿地の工場用地化<br>この頃、堀川のはえ（銀ぶな）が名物に               | 戦前の耕地整理・区画整理面積<br>戦前市域の55%<br>（現在市域の27%）                                                                                                | 35万人  |
| 大正 | '20 都市計画法施行<br>市営住宅創設<br>'21 市立保育園開設<br>16町村を合併（人口62万）<br>'22 市電の市営化<br>'23 日本初の街路灯（広小路）<br>'26 市内での土葬禁止                                               | '24 街路・運河網都市計画決定<br><b>都市計画の曙</b>                            | '25 区画整理はじまる<br>'26 都市計画公園の決定                                                                                                           | 62万人  |
|    | '34 人口100万人突破<br><b>戦時統制</b><br>'38 ガソリンが切符制に<br>'40 市バスに木炭バス導入<br>物資統制（米の通帳制、砂糖・味噌・木炭等の切符制）<br>'41 ガソリン車禁止（代燃化）<br>'45 終戦（市域の1/4を焼失）<br>'46 復興都市計画の決定 | '32 中川運河完成<br>南西部の工場用地化<br>この頃、堀川の水質悪化すすむ<br>（'35のBOD35mg/l） | '35 東山公園・志賀公園開園<br>'37 東山動植物園開園<br>'39 風致地区の決定 5400ha<br>'40 都市計画緑地の決定 826ha<br><b>緑地整備の曙</b><br>戦中・戦後の燃料用伐採<br>→ 東部丘陵のはげ山化<br>'46 農地改革 | 100万人 |
| 昭和 |                                                                                                                                                        |                                                              |                                                                                                                                         |       |

## (3) 近代都市なごやの発展

## 生活衛生基盤の整備・化石燃料への転換・物流の拡大



- ・都市が拡大する一方で、農村は縮小し、都市と農村のつながりが弱くなりました。
- ・あらたな物流ルートができ、廃棄物が再利用されるしくみがなくなっていました。



- 明治22年(1889)の市制施行で、名古屋市は人口約15万7,000人、面積約13.34km<sup>2</sup>でスタートしました。
- 明治・大正から昭和の初頭には経済界の活況に伴い、商工業都市として順調な発展を続けました。
- 商業や工業の発達によって、人口は増加し、市街地が拡大しました。
- また、ごみなどの衛生インフラの整備や化石燃料への転換によって、生物資源の循環は大きく変化しました。

## ② 20世紀後半の急激な変化(まち)

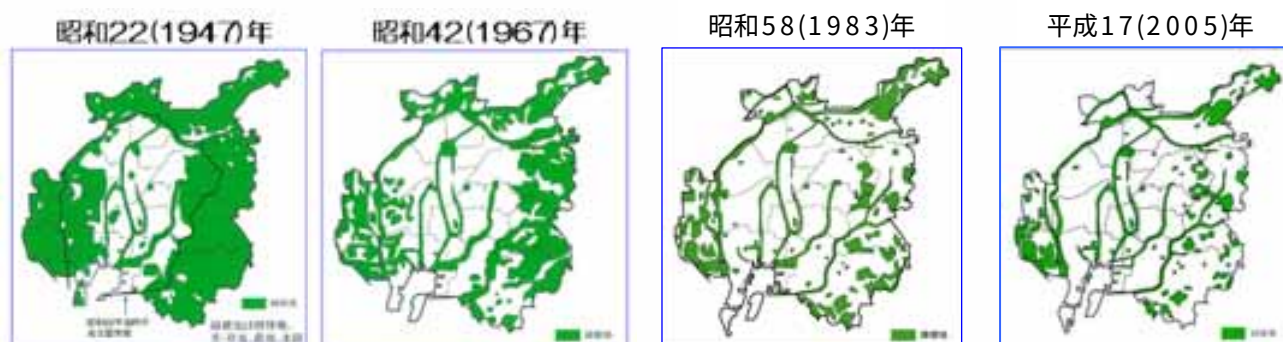
— 自然の摂理を超えた都市化により、失われていく生息地 —

- 20世紀の後半になると、技術の進歩が自然の制約を超えた開発を可能にし、一層の市街化が進みます。

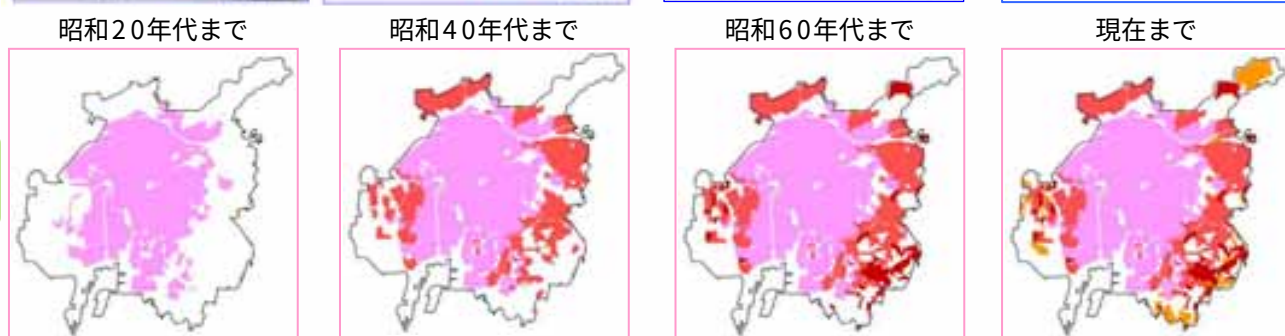
### 土地利用の変化

昭和40年ごろを境に、農地及び山林が減り、宅地が増え続けて急激な都市化が進んでいきます。農林漁業に携わる人も激減しています。

#### 緑被地



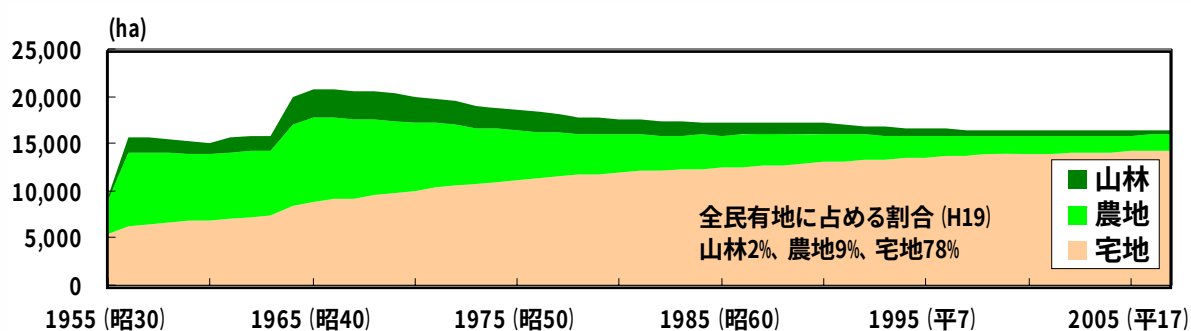
#### 土地区画整理



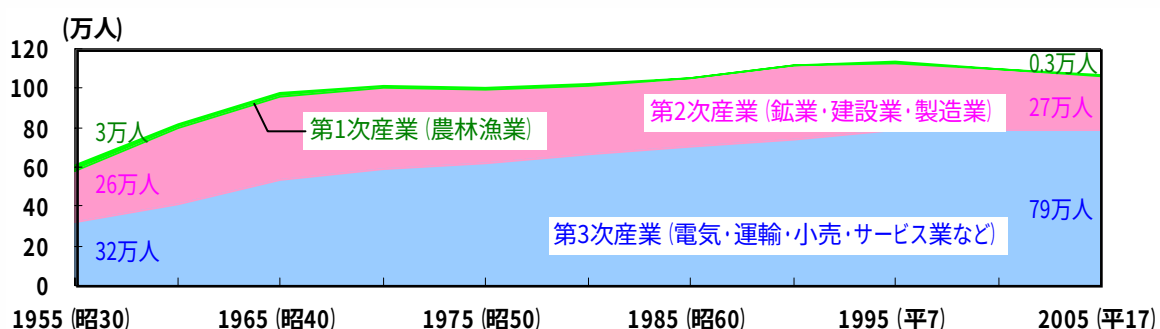
出典：名古屋市土地区画整理区域図（平成16年、名古屋市） 名古屋市みどりの基本計画 花・水・緑 なごやプラン（平成13年、名古屋市）

#### 農地山林面積

※民有地



#### 就業者数



出典：名古屋市百年の年輪—長期統計データ集—（平成元年、名古屋市） 名古屋市統計年鑑（平成元年～平成20年、名古屋市）



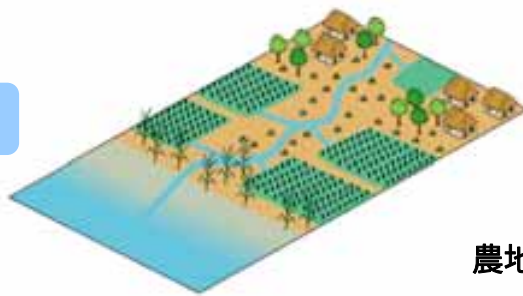
## (3) 近代都市なごやの発展

## いきもののすみかの変化

100年前

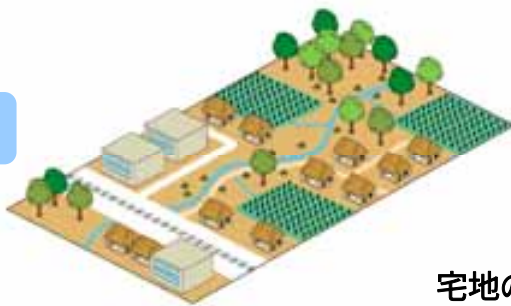
現在

西部(沖積平野)



農地から宅地へ

中央部(台地)



宅地の高度利用化

東部(丘陵地)



里山から宅地へ

- 高度成長期の大都市への人口流入の受け皿として、市域周辺部での区画整理が大きく進み、人口は著しく増加しました。
- 現在では市域326.43km<sup>2</sup>、人口約225万人の規模となりました。
- 開発による緑地・ため池の消失や公害の発生など、いきもののすみかは大きく変化し、生息空間の減少や繁殖場所が失われることになりました。

### ③ 20世紀後半の急激な変化(暮らし)

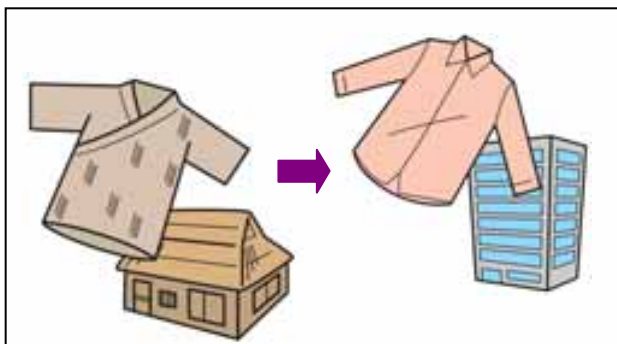
— 資源循環の崩壊が進み、風土を無視した暮らしへ —

- 生活スタイルは急激に変化し、流域内での生物資源の循環が崩壊しました。
- 化石燃料を大量に使った、現代の暮らしが登場します。

#### 暮らしの変化

名古屋市の繊維業衰退、衣料品流入増加のデータを出す。

衣



衣料品の原料である繊維については、日本の重化学工業化により、ナイロン、ビニロン、レーヨンなどの合成繊維に変わっていきました。さらに現代では、アジア諸国を中心に繊維工業が進展し、安い製品を日本に大量に輸出するようになりました。

そのため、日本では伝統的な繊維が作られなくなったのに加え、衣料品自体の生産量も減少しました。なごやでも同じような傾向があると考えられます。

食

下の図は、日本全体の食および食料自給率の変化を示しています。昭和35年度には79%だった食料自給率が、現在では40%に低下しています。また、消費する物の種類にも変化が見られます。なごやでも同じような傾向があると考えられます。

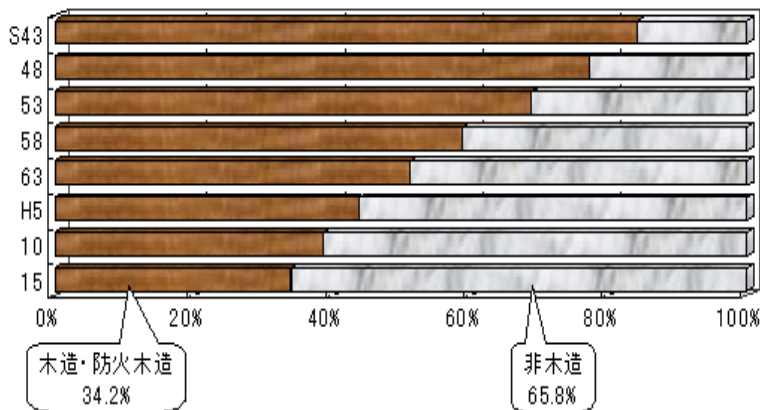
食および食料自給率の変化

名古屋市の食料自給率低下のデータを出す。

## (3) 近代都市なごやの発展

## 住

住宅の構造別割合の推移



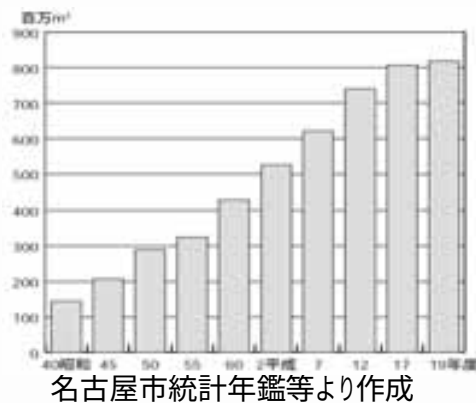
左の図は、昭和15年以降のなごやについて、住宅の構造別割合の推移を示しています。

鉄骨・鉄筋コンクリート造などの非木造住宅が年々増加しており、昭和43年の時点で住宅全体の65.8%となっています。

出典：名古屋の住宅・土地—平成15年住宅・土地統計調査結果—（平成17年、名古屋市）

## 生物資源から化石燃料へ

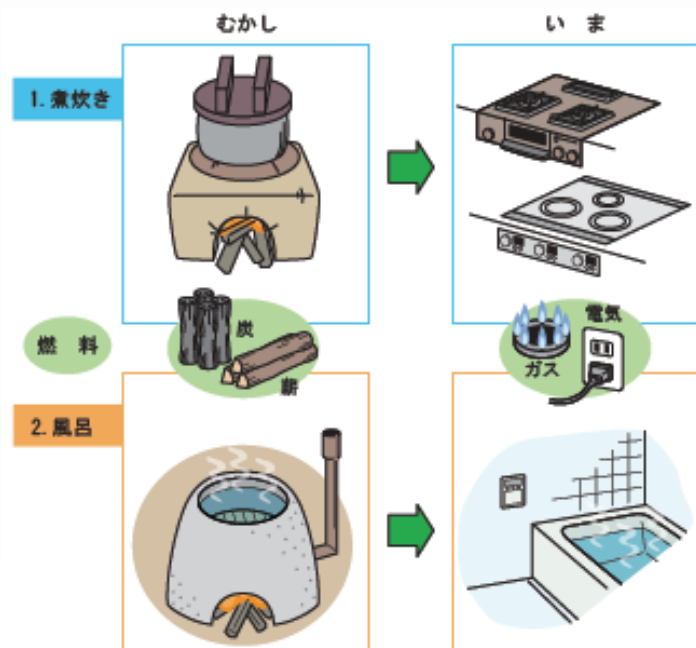
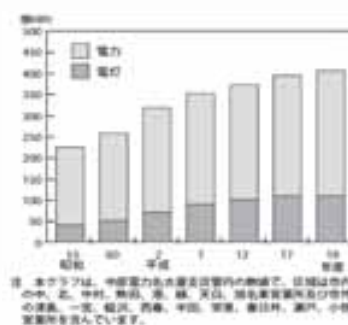
## 名古屋市内の都市ガス消費量の推移



なごやの平成19年度における都市ガスの消費量は約818百万m³で、あり昭和40年頃に比べて約5.7倍になっています。

また、販売電力量は約404億kWhで、昭和55年頃に比べて約1.8倍になっています。

## 名古屋市内の販売電力量の推移



- 産業構造の変化にともない、伝統工業が衰退し、大量生産の時代になりました。
- 暮らしが変わり、物やエネルギーを大量に消費する生活スタイルになりました。
- 衣食住のそれぞれで、文化的な固有性が失われてきました。

# 第3章

## 現在のなごやの姿

### 現状編

— 今のいきものたちとわたしたちの暮らしとの関わり —



## (1) 身近な隣人—なごやのいきものたち

—いきものたちは、残された生息空間で頑張っていて、そこは世界ともつながっている—

市内にわずかに残された生育空間に、なごやのいきものたちは、いまだに息づいています。

そうしたいきものたちは、流域や世界となごやを結びつけています。

地域のいきものの写真

# ① 今のなごやのいきものたち

— 今も残る生息地には、まだいきものたちがくらしている —

- 市街地の拡大によって、いきもの達の生育空間はかなり小さくなりましたが、東部の丘陵地や河川敷、大規模な緑地などには、いまだ様々ないきものがくらしています。

3つの地域に残されたすみか



出典：緑の基本計画 参考資料集（200●年、名古屋市）

## (1) 身近な隣人—なごやのいきものたち

## なごやの貴重ないきもの

- ・絶滅のおそれのある貴重ないきものは、東部に多く分布しています。市全域の貴重ないきものうち、植物では65%、動物では73%が東部に分布しています。
- ・都市化の進んだ中央部にも、残された緑地に貴重ないきものが分布しています。
- ・西部には、庄内川の河口部など水鳥の生息地が残っており、貴重な鳥類が多く分布しています。

| 区分    |     | レッドデータブックなごや2004 掲載種数 |     |     |            | 名古屋市<br>確認種数 |
|-------|-----|-----------------------|-----|-----|------------|--------------|
|       |     | 西部                    | 中央部 | 東部  | 名古屋市<br>全域 |              |
| 維管束植物 |     | 31                    | 19  | 174 | 267        | 1,560        |
| 動物    | ほ乳類 | 4                     | 2   | 15  | 16         | 25           |
|       | 鳥類  | 32                    | 15  | 24  | 40         | 231          |
|       | は虫類 | 4                     | 4   | 6   | 6          | 13           |
|       | 両生類 | 3                     | 0   | 5   | 6          | 12           |
|       | 魚類  | 4                     | 5   | 7   | 8          | 58           |
|       | 昆虫類 | 26                    | 57  | 76  | 105        | 2,457        |
|       | 小計  | 73                    | 83  | 133 | 181        | 2,796        |

(備考) 西部: 西区、北区、中村区、中川区、港区  
 中央部: 東区、中区、昭和区、瑞穂区、熱田区、南区  
 東部: 千種区、守山区、緑区、名東区、天白区

- 3つの地域には、特徴的ないきものの生育空間が、わずかに残されています。
- 西部は、庄内川や矢田川の堤防や河川敷の草地や水田、庄内川河口部の藤前干潟など
- 中央部は、公園や街路樹、堀川、名古屋城や熱田神宮の緑地など
- 東部は、東谷山、東山丘陵の雑木林、ため池など
- 市内では1600種近い昆虫が記録されていますが、特殊な種を除いたほとんど全てが、丘陵地に分布しています。

## ② なごやの生物多様性マップ

— 今の3つの大地で、いきものたちはどうやって暮らしているのか —

- 現在、なごやのいきものたちは、3つの大地でどのように暮らしているのでしょうか。
- 100年前からどのように変化したのでしょうか。

### 現在のなごや

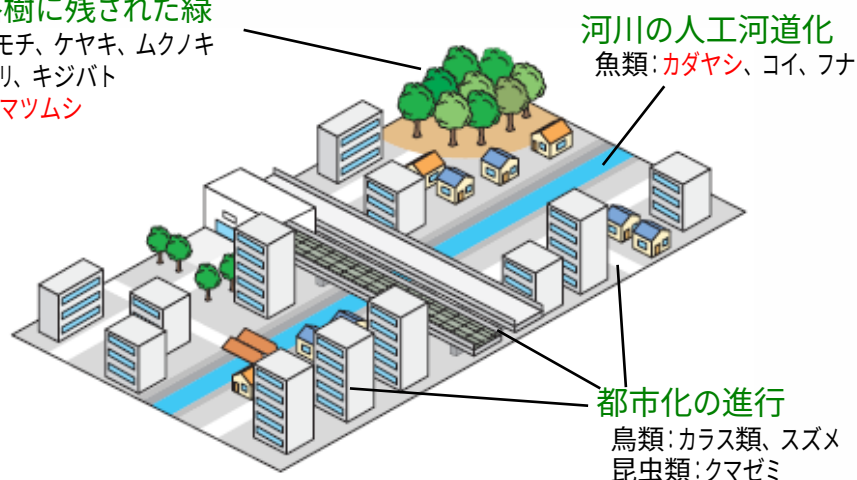
#### 西部(沖積平野)



#### 中央部(台地)

##### 公園、社寺林、街路樹に残された緑

植物: クスノキ、クロガネモチ、ケヤキ、ムクノキ  
鳥類: アオバズク、ムクドリ、キジバト  
昆虫類: アブラゼミ、アオマツムシ





## (1) 身近な隣人—なごやのいきものたち

## 東部(丘陵地)

## 里山林、湿地、ため池の減少

植物:コナラ、シイ類、アカマツ

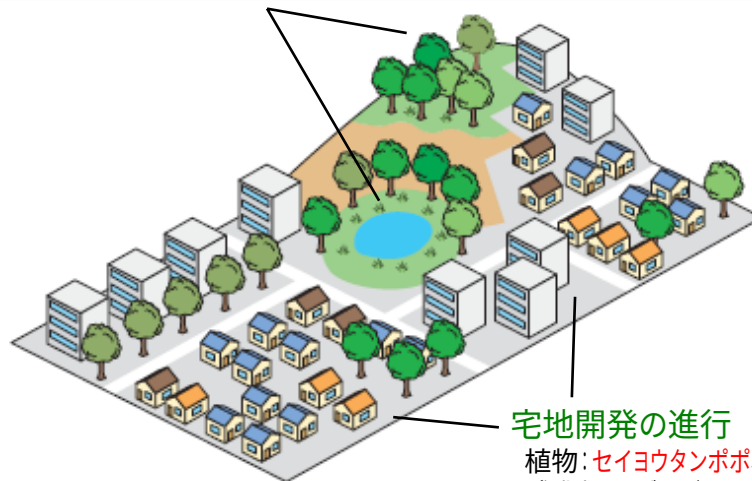
哺乳類:タヌキ

鳥類:オオタカ

爬虫類:イシガメ、ミシシippアカミミガメ

魚類:カダヤシ、オオクチバス

昆虫類:ヒメタイコウチ



## 宅地開発の進行

植物:セイヨウタンポポ、セイタカアワダチソウ

哺乳類:ドブネズミ

鳥類:カラス類、スズメ、ツバメ

昆虫類:クマゼミ、アオマツムシ

- 西部では、干潟や水田が減少し、河川や海岸が護岸化されました。造成地も拡大し、いきもののすみかが減少しました。
- 中央部では、都市化が進み、いきもののすみかは社寺林や公園、街路樹などのわずかな緑地となりました。
- 東部では、宅地開発が進み、いきもののすみかは雑木林やため池、湿地などわずかになりました。
- 外来種が侵入し、なごやの広い範囲に広がっています。

### ③ 世界からみた、なごやの生物多様性

— 今も残る生育空間は流域や世界ともつながっている —

- 市域を越えて名古屋にやってくる動物たちもいます。
- なごやに残されたいきものの生育空間は、流域や世界とつながっているのです。

#### 流域圏におけるなごやの位置づけ

| 区分    |     | 名古屋市<br>確認種数 | 愛知県<br>確認種数 | 岐阜県<br>確認種数 | 三重県<br>確認種数 |
|-------|-----|--------------|-------------|-------------|-------------|
| 維管束植物 |     | 1,560        | 約2,220      | 2,897       | 約3,000      |
| 動物    | ほ乳類 | 25           | 71          | 55          | 42          |
|       | 鳥類  | 231          | 398         | 281         | 239         |
|       | は虫類 | 13           | 16          | 38          | 19          |
|       | 両生類 | 12           | 21          |             | 21          |
|       | 魚類  | 58           | 51          | 101         | 145         |
|       | 昆虫類 | 2,457        | 約7,600      | 5,621       | 約7,000      |
|       | 小計  | 2,796        | 8,157       | 6,096       | 7,466       |

(出典) 名古屋市：レッドデータブックなごや2004

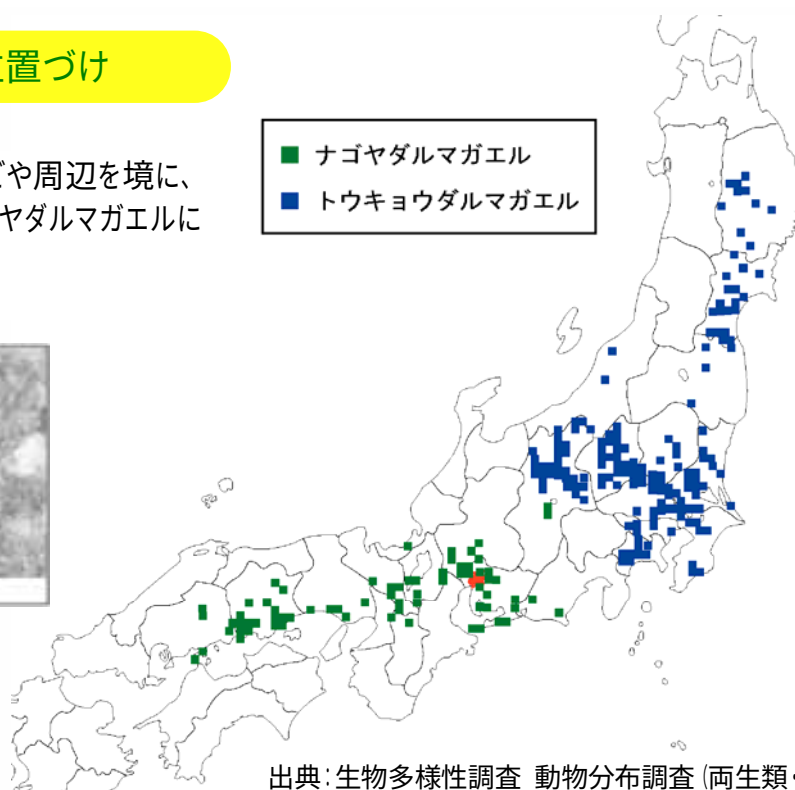
愛知県：レッドデータブックあいち2009

岐阜県：岐阜県の絶滅のおそれのある野生生物—岐阜県レッドデータブック— (2001年)

三重県：三重県レッドデータブック2005

#### 日本におけるなごやの位置づけ

- ・ダルマガエルの仲間は、なごや周辺を境に、トウキョウダルマガエルとナゴヤダルマガエルに分布が分かれています。



出典：生物多様性調査 動物分布調査 (両生類・爬虫類) 報告書  
(環境省、平成13年)

## (1) 身近な隣人—なごやのいきものたち

## 世界におけるなごやの位置づけ

藤前干潟とシギ・チドリ類の渡りルート



・日本は、地球上に34箇所ある「生物多様性ホットスポット（生物多様性が豊かでありながら破壊の危機に瀕している地域）」のひとつです。

・なごやは、シギやチドリが越冬地から繁殖地へ渡っていく上で重要な中継地となっています。

シギ・チドリ類の主な渡来数  
(平成14年春期)

平成14年春期（3～4月）の渡来渡来数が多い渡来地について個体数と種数（カッコ内）を記述しています。



出典：名古屋市ホームページ 藤前干潟情報

(<http://www.kankyo-net.city.nagoya.jp/fujimae/birds.html>)

- 藤前干潟は、国内でも最大規模のシギ・チドリの中継地で、ロシアなどの繁殖地と、オーストラリアなどの越冬地を結んでいます。
- なごやに残された生育空間は、流域や世界を結ぶ重要な役目をもっているのです。
- このような場が失われると、流域や世界のつながりも失われることになります。

## コラム

都市における生物との共生、ふれあい事例

名古屋市：カモシカ、キツネ、かご池のモクスガニ

海外の事例



## (2) 快適な人の暮らしといきもの

— 快適な人の暮らしの追求が、いきものたちの世界を変えている —

現在のわたしたちは、様々な資源を消費して、便利で快適な暮らしを追求しています。その一方で、なごやや世界のいきものたちの暮らしを脅かしています。

# ① いきものにとって暮らしにくいまち

— 人に都合のいいまちのつくりは、いきものにとって暮らしにくい —

- 今のなごやは人の都合を優先して造られています。
- いきものとの関係はどうなのでしょう。
- まちの構造がいきものに与える影響についてみてみましょう。

## 人に都合のいいまち→生き物にとって暮らしにくいまち

### A: 海岸の護岸整備

- ・防災や港湾整備の目的で、人工的な護岸が造られました。
- ・自然の干潟や砂浜がなくなり、そこをすみかとしていた動物たちがくられなくなりました。
- ・陸と海との間で、生物のつながり・行き来がなくなりました。

### B: 道路の舗装

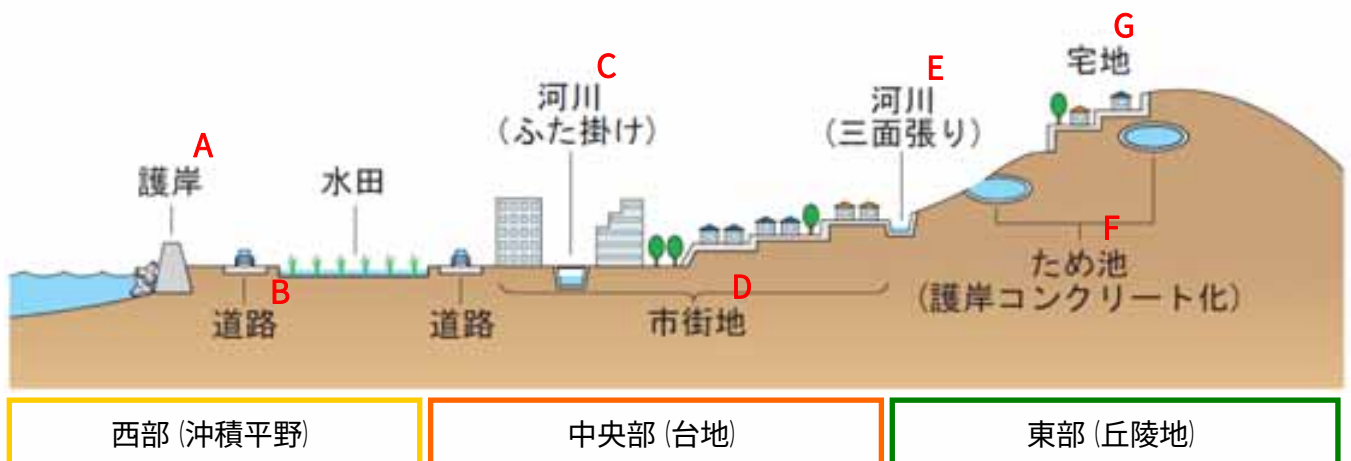
- ・3地域別の舗装率は、……。
- ・道路の舗装により、雨水の浸透能が低下し、大雨のときなどには水があふれるようになりました。
- ・隠れる場所がなくなったため、道路に出てきた動物が轢死するなど、生物にとっての危険が増えました。

(出典: )

### C: 水路のふた掛け

- ・河川 (水路) が暗渠化されることにより、水生生物の定着や移動が不可能になりました。
- ・水辺を利用する鳥なども減りました。

### なごやの断面図



## (2) 快適な人の暮らしといきもの

**D: 市街地化**

- ・面的に舗装をすることで、「土」の部分が減りました。
- ・生態系で分解者にあたる土壌微生物が減り、自然の持っていた分解機能が低下しました。
- ・むかしは、分解され自然に還っていた落ち葉や枯れ枝なども、人工的な処理を必要とするゴミになってしまいました。
- ・小さな草地などもなくなり、昆虫や鳥など小動物のすみかが失われました。

**E: 河川 (三面張り)**

- ・河川が持っていた水の浄化機能が低下し、水がきたなくなりました。
- ・河川沿いの草地などを利用していた動物たちの住処が失われました。

**F: ため池護岸のコンクリート化**

- ・ため池の機能が、灌漑から洪水調節や親水に変わりました。
- ・管理の手が入らなくなったため、防災や安定性を図るため、護岸のコンクリート化が進められました。
- ・コンクリート化により、陸地とため池との境界につながりがなくなり、それぞれが分断されてしまいました。
- ・陸地とため池の両方を利用する生物が、すみにくい環境になったことで減ってしまいました。

**G: 丘陵地の宅地開発**

- ・近代化とともに、自然性の高い丘陵地においても宅地開発が進みました。
- ・そこにすむ生物同士の関係性が分断されてしまいました。

- 今のなごやでは、道路は舗装され、池や川の護岸も整備されています。
- このような人工的な構造物があると、いきものは移動ができなかったり、卵を産めなくなったりするのです。

## ② 人の予想を越えて広がるいきものたち

### — 流通網の拡大が、本来そこにはないはずのいきものを運ぶ —

- 世界中に物流のつながりができた現在、流通網に乗って外国から入ってきたり、逆に外国に出て行ってしまいういきものがあります。それらが強い繁殖力を持つ場合には、新しい土地で、もともたいた生物の生息・生育をおびやかすことになります。
- 人間の活動によって外国から入ってきた生物のことを外来生物といいます。外来生物が侵入すると、その土地の生態系が失われてしまうことがあります。

#### 私たちのくらしに入り込む外来生物

##### ボタンウキクサ (水生植物)

- ・南アフリカ原産で、日本には観賞用として1920年代から導入されました。
- ・水路や湖沼で大繁茂し、他の植物が生育できなくなったり、魚介類に影響を及ぼします。
- ・守山区の大森雨池では、かつて大増殖し、貴重種のカガブタが消失しました。

##### ワニガメ (爬虫類)

- ・アメリカ合衆国が原産で、日本にはペットとして導入されました。
- ・現在国内での繁殖は確認されていませんが、肉食傾向が強く、生態系に影響を及ぼします。
- ・名古屋市では、2009年6月に堀川で捕獲されています。

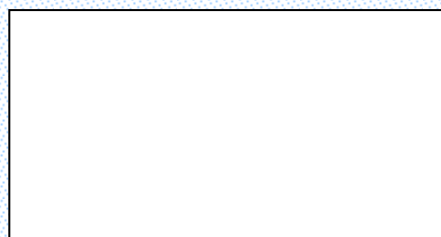


##### ヌートリア (ほ乳類)

- ・南米が原産で、日本には第2次大戦中に毛皮採取用として導入されました。
- ・農作物への被害や、ため池などの水生植物を壊滅させたり、巣穴によって堤防の強度が低下するなどの影響を及ぼします。
- ・名古屋市では、有害鳥獣に指定しています。調査で、戸田川で遊泳している個体が確認されています。

#### ■ 海洋生物のバラスト水による拡散

船舶の航行時に、船を安定させるために積み込まれるバラスト水。到着した港で荷を積み込む際に捨てられるため、そこに含まれている生物が、本来の生息地でない環境に広がり、大きな問題となっています。



チチュウカイミドリガニ (名古屋港の写真)



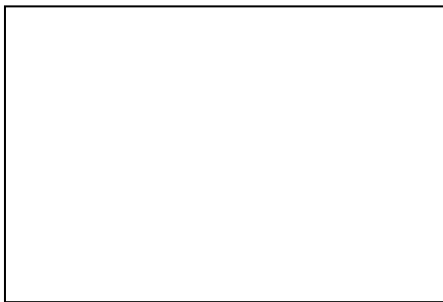
## (2) 快適な人の暮らしといきもの

## 海外で悪さをする日本原産の生物

※特に被害が報告されている国名を記載

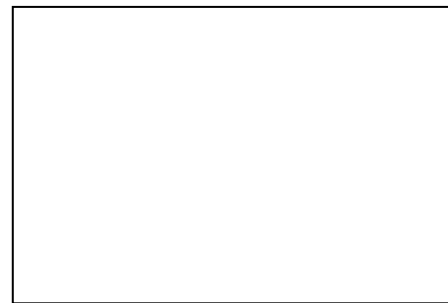
## マメコガネ (昆虫) 【アメリカ】

- ・ジャパニーズビートルと呼ばれ、1916年に初めて報告されました。
- ・日本から輸出した植物について、海を渡ったと考えられています。
- ・成虫・幼虫ともに、マメ科をはじめとする様々な植物を食べ、農作物や芝生への大きな被害を与えることが報告されています。



## ワカメ (海藻類) 【ニュージーランド、オーストラリア、アメリカ、フランス、メキシコ】

- ・孢子 (生殖細胞) がバラスト水によって、世界各地に拡散しました。
- ・港の中や潮溜まり、波あたりの強い岩礁など、沿岸のあらゆる場所で繁茂しています。
- ・分布は拡大しつつあり、在来生態系へ大きな影響を与えるおそれがあると考えられています。



## イタドリ (植物) 【イギリス】

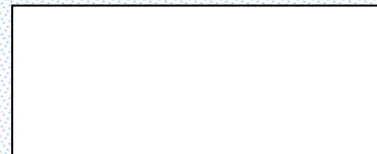
- ・江戸時代、シーボルトが日本から持ち帰るなどして、欧米各地に広がりました。
- ・草原や、河川敷を埋め尽くすほど繁茂します。
- ・イギリスでは、対策に年間約2500億円かかり、天敵昆虫を用いた防除策が検討されています。



## ■日本経由で世界に拡散した生物

## - ヒトスジシマカ -

東南アジアが起源の、通称“ヤブカ”。デング熱などのウイルス病を人にうつします。アメリカでは1983年に見つっていますが、これは日本からの中古タイヤの輸送に伴って運ばれたと考えられています。現在では、欧州、中南米、中東に分布を広げています。



出典：日本生態学会編・外来種ハンドブック (2002.地人書館)  
ウィキペディア、朝日新聞 (2009.8.16)

- よく知られているブラックバスやアカミミガメなどは、レジャーやペットとして、外国から移入されたいきものです。
- 外来種の侵入により、もともとあった生態系が脅かされる、人への伝染病が持ち込まれる、農林漁業へダメージを与える、など多くの悪影響がみられます。
- 外来種に対しては、侵入経路を把握し、予防対策をとることが大事です。
- 外来の園芸植物を野生化させない、ペットの飼育に責任を持つなどにより、私たち市民も予防の一役を担うことができます。

### ③ いつまでも買えると思うな地球資源

— 世界の生物多様性に影響を与えている私たちの暮らし —

- 現在の名古屋市民の生活は、食料やエネルギーなどあらゆる分野で周辺地域での生産や、外国からの輸入に頼っています。
- ここでは、どれほどわたしたちの暮らしが外国に影響を与えているか、みてみましょう。

なごや市民のくらしを支えるために必要な土地面積

なごや市民が  
日常生活で消費する  
生物資源の量



それだけの生物資源を  
生産するために  
必要な土地面積

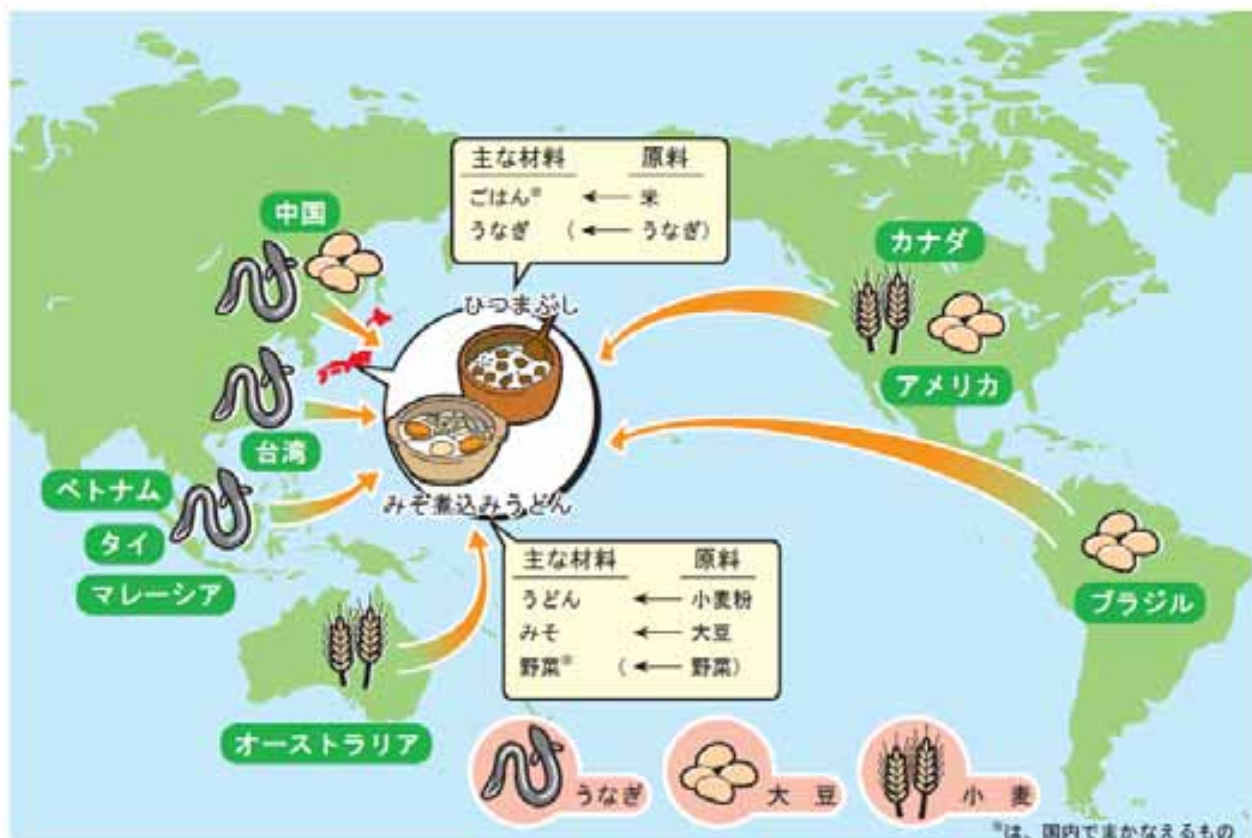


データは要確認

名古屋市面積の **94倍！**

わたしたちの暮らしは、市域の94倍の土地に支えられています。

「なごやめし」を代表するひつまぶしやみそ煮込みうどんも、原料の多くを海外に頼っています。



## エビとマングローブ林の生物多様性

日本で食べるエビの95%は、東南アジアやオーストラリアなどの外国から輸入しています。  
特に東南アジアでは養殖生産が盛んで、沿岸のマングローブ林を伐採して、エビの養殖池が造成されています。

なごや市民が食べるエビを生産するために、どのくらいの面積の養殖池が必要でしょうか？

日本人が年間に食べるエビの量 75匹/人

なごや市民 (225万人) では、 約1億7000万匹

エビの生産量: 50匹/たたみ1畳  
30匹/m<sup>2</sup>

データは要確認

1億7000万匹のエビを養殖するために必要な養殖池の面積:

約340万畳  
約563ha (名古屋ドーム117個分)

マングローブ林は80種以上の植物で構成され、  
魚、カニ、エビ、貝など様々な生物のすみか

わたしたちは、年間、340万畳 (名古屋ドーム117個) 分の  
マングローブ林の生物多様性に影響を与えています。

協力: NPO法人 藤前干潟を守る会

## 木材と森林の生物多様性

日本の年間木材需要量 8,237万m<sup>3</sup>

そのうち、約77% 6,374万m<sup>3</sup>が外国から供給

↓

なごや市民が消費する輸入木材量 約125万m<sup>3</sup>

↓

国産スギでこれだけの木材量をまかなうとして、

データは要確認

それだけのスギを生産するために必要な森林の面積 約1,136ha

※国内スギ林(林齢50年)の現存量(1haあたり)をもとに算出

名古屋市面積の約3.5倍

わたしたちは、年間、市面積の3.5倍に相当する  
森林の生物多様性に影響を与えています。

一方で国内の森は使わないため劣化しています

劣化したことによる問題も発生しています

国内の木材を使うべき

↓

なごやでは上流域(加子母)の木材

おいしい水も供給してくれます

↓

健全で持続可能な森を維持するために、適切な利用が必要です

関心を持ちましょう



## 米と水田の生物多様性

水田は生態系としても重要

主食であるコメをつくる場であり、その生態系は私たちの生活に影響されやすい

日本人が年間に食べる米の量 60kg (約1俵) / 人

↓

データは要確認

なごや市民が消費するコメ 約1億3500万kg

↓

米の生産量: 6000kg/ha

↓

なごやで消費する米を生産するために必要な水田の面積 2万2500ha

名古屋ドーム4,671個分

名古屋市面積の70%

**わたしたちは、年間、市面積の70%に相当する  
水田の生物多様性に影響を与えています。**

かつて、水田には、ドジョウやフナ、メダカやホタル、カエルなど、たくさんの生物がいました。

昔の水田は、排水が悪くぬかるむため作業が大変でしたが、ほ場整備が進められ、機械化が進み、現在では生産性の高い水田になりました。

一方で、ほ場整備によって周辺環境との連続性が分断されたり、農薬の過剰な使用などによって、水田や水路における魚類や水生昆虫類、鳥類、両生類などが減少しました。

↓

消費者の意識が変われば、生産者も変わります

関心を持ちましょう

- 今のわたしたちのくらは、外国の生物資源に依存しています。
- 例えば、生活を支える食料品は、その多くが海外から運ばれてきたものです。
- わたしたちのこうしたくらしによって、海外の生物資源が枯渇したり、いきもののすみかが失われていることに気づかなければなりません。

### なごやのものづくりのルーツ

なごやとその周辺の地域には、江戸時代より「糸の産業」、「木の産業」、「土の産業」がありました。これらが、100年、150年かけて、世界に冠たる先端産業へと進化してきました。その歴史は、「糸の系譜」、「木の系譜」、「土の系譜」とあらわされています。

「糸の系譜」・・・繊維機械産業、自動車産業

「木の系譜」・・・工作機械・産業機械産業

「土の系譜」・・・陶磁器産業

### (3) いきものからいただく豊かな心

— いきものと共にくらすことの心の豊かさを失っていませんか？ —

# ① いきものからいただく豊かな心

— いきものから感じる心の豊かさを失っていませんか？ —

- 日本には「四季とともに生き自然と共生する」という固有の自然観があります。
- しかし都市化の進んだ現在のなごやでは、自然を感じたり自然に触れる機会すらない人が増えているのではないのでしょうか。
- 自然やいきものとのつながりを感じる、心の豊かな暮らしを考えてみませんか。

命のありがたみを感じる暮らし

暮らしに残るいきものとのつながり

## お鍬まつり (おくわまつり)

- ・伊勢神宮の山に鍬の形の榊が生えると、それを五穀豊穡の予兆として流行したおまつりです。
- ・約60年周期で大流行するおまつりで、そのときには祭礼のわくを越え、日常生活を麻痺させる民衆運動としての側面もありました。

### 御鍬祭真景図略

資料) 名古屋市博物館、特別展  
盛り場・祭り・見世物・大道芸 図録

## 七尾天神 (ななおてんじん)

- ・城が造られる100年ほど前、七つの尾をもつ亀が修行僧の前に現れました。背中には菅原道真の木像を背負っていました。これらを安置したのが始まりとされています。
- ・東区にあります。

資料) 尾張名所図会 絵解き散歩

## 馬頭観音

- ・六観音のひとつで、頭上に馬頭をいただいています。
- ・馬頭をいだいた観音様の姿を見て、馬とともに生活する人々の中に、馬の無病息災を祈る民間信仰が生まれました。
- ・なごやでも塩付街道(南区)、土橋(千種区)、龍泉寺(守山区)、東栄八幡社近く(瑞穂区)など各所に残ります。

画像／イラスト

## 猪子石 (いのこいし)

- ・名東区猪子石村には、大昔から猪が寝ているような形をした大きな石がふたつありました。牡石(おいし)、牝石(めいし)とよばれ、現在はそれぞれ猪子石神社と大石神社にあります。
- ・牝石には、多産な猪にあやかろうと安産を祈願するようになりました。

画像



## (3) いきものからいただく豊かな心

## 季節を感じる暮らし

## 天神さまとウソ替え神事

- ・家の中で、鳥をかたどった小さなおもちゃを見たことはありませんか。それは、ウソ替え神事でさずけられたものかもしれません。
- ・ウソは、1年のわざわいを幸せに替え幸運をまねく鳥とされています。
- ・天満宮の守護鳥でもあり、お正月にはなごやを含めた各地の天満宮でこの神事がおこなわれます。



画像

「去年のウソ（嘘）が今年はまことになりますように」

## なごやのお花見

- ・今も昔も人々に好まれるお花見です。
- ・昔は、ツツジやヤマブキをめでていました（名所：東区・山吹谷など）。
- ・なごやの桜の名所変遷  
（昔から：中区・堀川・日置橋、今では：西区・庄内緑地ほか）

堀川日置橋の桜（尾張名所図会）

## 川は遊び場だった

- ・昭和30年代頃まで、天白川や山崎川はこどもたちの遊び場でした。なごやにとって川は、自然を感じ、自然に触れることができる、とても楽しい場所だったのです。



※画像は参考

- 命のありがたみや季節を感じる暮らしは、心を豊かにする暮らしです。
- 地域や暮らしに残る自然や文化の中から、いきものとのつながりや命のありがたみを考えてみましょう。そして、その気持ちで、わたしたちのいまの豊かな暮らしを振り返ってみましょう。

## コラム

#### (4) 社会情勢の変化のきざし



# ① 社会情勢の変化のきざし

— 21世紀は着実に環境重視の社会にシフトしています —

- 20世紀後半、環境問題は「公害問題」から「地球環境問題」、そして「持続可能性」に変化しました
- 2050年に向かって、社会はどう変化していくのでしょうか？

## 環境問題の変化

・環境問題の変化を時代を追ってみましょう。

|                  |                                                                                                                                                                          |                                                    |
|------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------|
| 1960年<br>～1970年代 | <p>●高度経済成長期の公害（産業型公害）の激化</p> <p>○「水俣病、イタイタイ病、四日市ぜんそく」「光化学スモッグ」</p> <p>○1970年代には公害対策が進む</p>                                                                               | <p>1969年：市内水質汚濁・大気汚染ピーク</p> <p>1973年：地盤沈下ピーク</p>   |
| 1980年代           | <p>●「公害」から「環境問題」へ</p> <p>●産業型公害から都市生活型公害へ</p> <p>○「特定地域の被害」から「広域にわたる動植物・自然へ被害」、さらに「オゾン層の破壊、酸性雨、地球温暖化など」へ</p> <p>○交通公害、近隣騒音、生活雑排水による河川・湖沼の汚染、生活廃棄物など</p>                  |                                                    |
| 1990年代           | <p>●環境問題は地球規模のとりくみへ</p> <p>○1992年地球サミット開催、アジェンダ21採択</p> <p>「持続的発展が可能な開発を実現するための各国の行動計画を規定」</p> <p>○廃棄物問題、生物多様性の議論すすむ</p> <p>○国内では新しい公害「室内空気汚染（ホルマリン、VOCなど）」、「ダイオキシン」</p> | <p>1999年：藤前干潟埋め立て断念<br/>ごみ非常事態宣言<br/>市環境基本計画策定</p> |
| 2000年代           | <p>●持続可能な社会へ</p> <p>○リサイクル問題の議論すすむ</p> <p>○循環型社会の構築へ</p>                                                                                                                 | <p>2001年：藤前干潟ラムサール条約登録</p> <p>2005年：「愛・地球博」開催</p>  |

※青字：なごやの状況

## 世界の都市の発展

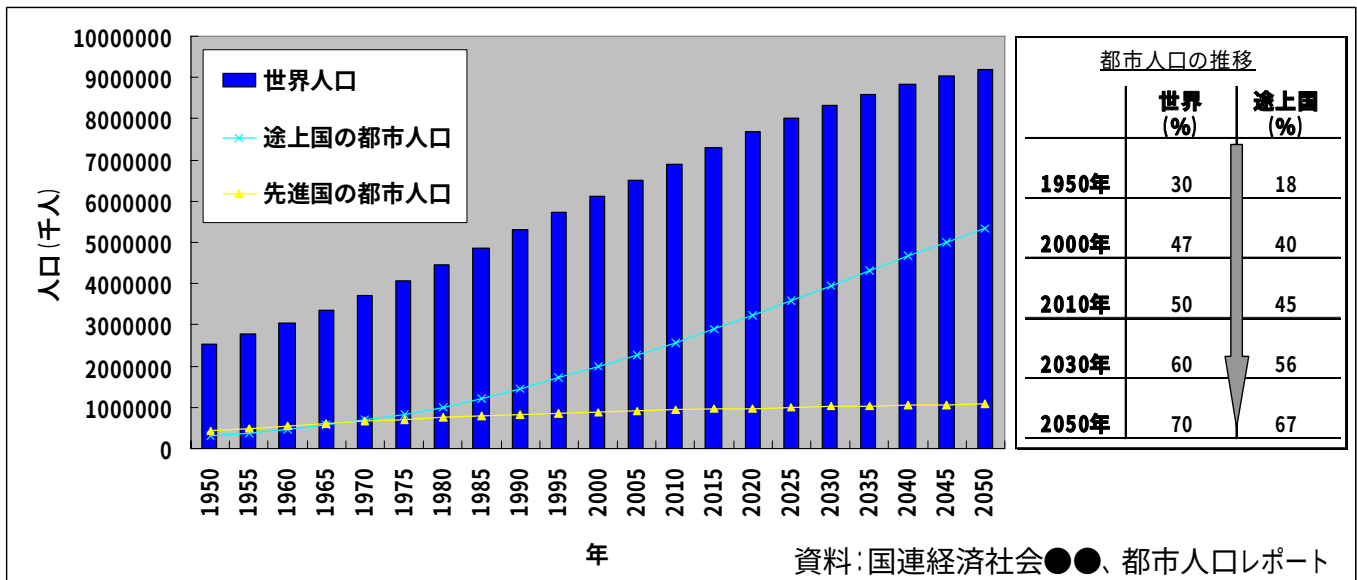
・中国やインド、マレーシアなどアジアを中心とした新興国では、高成長による都市化が進んでいます。



## (4) 社会情勢の変化のきざし

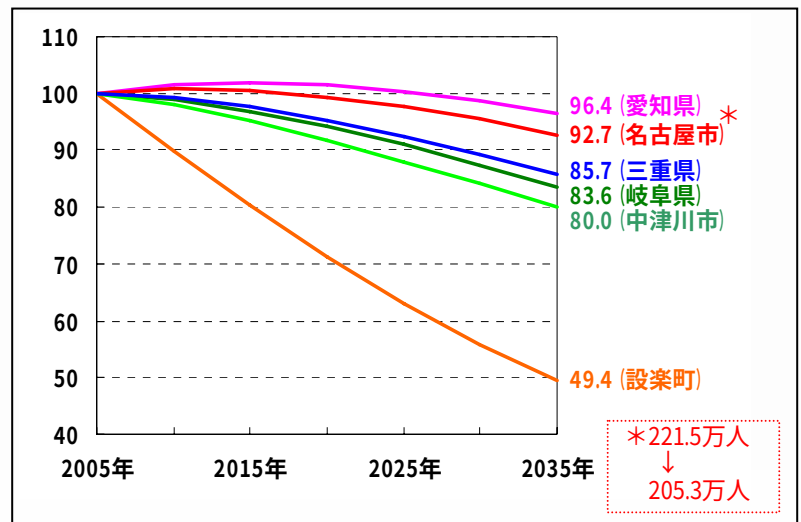
## 2050年の世界の都市

- ・現在、陸地に占める面積がわずか2%の都市が、地球の自然資源の約75%が消費しています。
- ・今後、人口100万人以下の中小都市が、現在途上国とされている国々で増えると予測されています。
- ・それにともない、さまざまな消費量が増えるために、日本にはこれまでのように十分な物が入ってこなくなります。



## なごやの将来

- ・日本国内では、人口は減少すると予想されています。その傾向は農村部で特に深刻です。
- ・なごやでも30年後には約16万人減少すると見込まれています。
- ・人口減少とともに、高齢化も進みます。
- ・農村が衰退し、生産力が低下します。



出典：日本の将来推計人口（平成18年12月推計）（平成18年、国立社会保障・人口問題研究所）

日本の市区町村別将来推計人口（平成20年12月推計）（平成20年、国立社会保障・人口問題研究所）

- 世界が変化していく中、これまでのように海外に依存して暮らしていくことはできるでしょうか。
- なごや、さらには日本の将来を踏まえて、私たちの暮らしやまちづくりを考えてみましょう。

# 第4章

## 望ましいなごやの姿

### 展望編

— わたしたちが目指すべきなごやの姿とは —

## (1) こんなことを感じませんか？

— なごやの歴史と現状から、あなたは何を感じましたか？ —

2章歴史編、3章現状編をとおして、みなさんはどんなことを感じましたか？  
なごやの人の暮らしや、まちづくりは、このままで良いのでしょうか？

# ① こんなことを感じませんか？～ひとの暮らし編～

—わたしたちの暮らしは、このままでいいのでしょうか？—

- 今のわたしたちの暮らしは、生物多様性の恵みに支えられています
- 2章ではなごやの歴史を、3章では現在について、それぞれ詳しくみてきました
- わたしたちの暮らしは、これからどうなっていくのでしょうか？

## 気づき

1. これからの子供のことを考えると、人との関わり方から教育のあり方まで、いろいろ問題があるように思えるなあ…

2. 食べ物が単一化してしまっておもしろくないなあ、それにしても農家の担い手っているのかなあ…

3. ご近所をはじめとした人との連携がなくなってきていると思うけど、いざというときは他人任せかな…

4. 里山的文化の振興をすると、美意識の育成にもなるんじゃないかな…

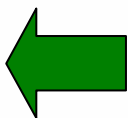
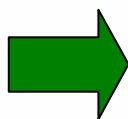
## 欲求

1. 行政が考えてくれるからいいだろう…

2. 大量生産・大量消費の時代にあわせた形の農業をやる必要があった。農家はもうからないから、子供には継がせるべきか…

3. ご近所づきあいもめんどろ、まちづくりは役所の人の仕事だし…

4. まずはインフラ、文化はあと…





(1) こんなことを感じませんか？

## 海外における事例

### 大都市のなかの自然豊かな公園 -スタンレー・パーク- 【カナダ】

カナダのブリティッシュコロンビア州、バンクーバー市のダウンタウンの西にある公園、スタンレー・パーク。イングリッシュ湾に突き出た先端部分にあり、バンクーバー市民の憩いの場所となっています。約400ヘクタールもある広大な敷地は、もともとインディアンの所有地だった場所をカナダ政府が半永久的に借り受けたものです。公園内には、多くの針葉樹林があり大きい物では高さ100mのものもあります。また、リス、白鳥など沢山の動植物も迎えてくれます。

スタンレーパークの人気の理由は、自然が豊かであること、そして施設が充実していることです。カフェ、レストラン、ビーチ、テニスコート、ミニゴルフコース（レンタルあり）、家畜種を飼育するふれあい牧場、ミニチュア鉄道、ライオンズゲートブリッジ、プールなど色々あり、有料のものでも市立なので値段は比較的安くなりようできます。公園の一部には、銅像や彫刻、近代美術作品などもあり、まさに都会のオアシスとして絶好のロケーションにあります。

スタンレー・パークの夕日

## 100年後に向けて、こう考えてみませんか？

1. 自然の価値が見出せるコミュニティづくり、自然の価値を継承できる担い手づくりをしよう
2. 流域の上流に行ってみよう
3. 「楽しむ」コミュニティづくりをしよう
- 4.ムーヴメントをおこそう、文化人を巻き込もう

## ② こんなことを感じませんか？～まちづくり編～

— なごやのまちづくりは、このままでいいのでしょうか？ —

- かつては自然の地形を生かして造られたなごやのまちも、今では姿を変えました
- わたしたちは、身近な生きもの達の存在を、あまり意識しなくなっています
- なごやのまちは、これからどうなっていくのでしょうか？

### 気づき

1. 生きものの生息場所が減った。街の自然がパーツ化して、流域のつながりや循環が切れてしまった気がする・・・

2. 街では自然の緑が減ったけど、それだけでなく、土や水のある場所も減ってあんまり見なくなったなあ・・・

3. 生物が生きていく場所が減った気がする・・・

4. 生物についての基本的な情報の収集・分析・発信の場所がないから、生物や自然との接点もないなあ・・・



### 欲求

1. 土地はきちんと整備した方が、人は利用しやすいよ。街は、人が暮らす上でちゃんと機能することを優先に開発されるものでしょう・・・

2. 緑は街路樹や公園にあればいいよ。道路は舗装されていた方が雨の日に汚れないし、デコボコ道じゃあ車も大変。自然の川はなくなったけど、護岸整備されたら利用しやすくなるし、防災対策にもなる、飲み水はいざとなったらミネラルウォーターがあるし・・・

3. くらしが便利な方がいい。ヘビやカエルが家の庭にいたらなんだか気持ち悪いし・・・

4. 学習や文化的な集いの場所よりも、インフラ整備が優先だから・・・

(1) こんなことを感じませんか？

## 海外における事例

### 市民共同イニシアティブ制度【ドイツ】

ドイツ北西部のハム市では、市民の手によって様々な自然回復がなされています。自然に近い状態に改修された幼稚園庭、屋上緑化されたスポーツクラブのクラブハウス、ユースセンターの作業場に設置されたソーラーと風力設備、老人センターの小道を自然に近い状態につくり直したものの…。これらは「市民共同イニシアチブ」と名付けられた制度のもとで行われています。

目的が「ハム市内で自然と環境を修復し、または持続的に利用することに役立つもの」であれば、この制度の対象となります。申請は市民3人以上であれば誰でもできます。そして、申請者自身が作業を行うことが求められる以外に制約はなく、どのようなグループで取り組むかは全く自由です。

ひとつの活動には最高2,500ユーロが助成され、助成金は素材購入や専門家へのコンサルティング費用に充てられます。市民グループが費用全体の20%以上を提供する必要がありますが、市民が提供する労力がひとり1時間当たり5ユーロとして計算され、この労力提供を自己資金にあてることができるので、実際には市民がお金を出す必要はない仕組みとなっています。

子供たちの手で造られたヴィラ・クンターブント幼稚園の園庭

(資料：環境首都コンテストネットワークHP)

## 100年後に向けて、こう考えてみませんか？

1. 住民と一体になって、地域の特性を踏まえた自然の保全と再生を考えよう
2. 取り戻せるもの、あきらめるもの、バランスを考えた街づくりをしよう
3. なごやをブローニュの森のようにしよう
4. 自然史博物館をつくろう

## コラム

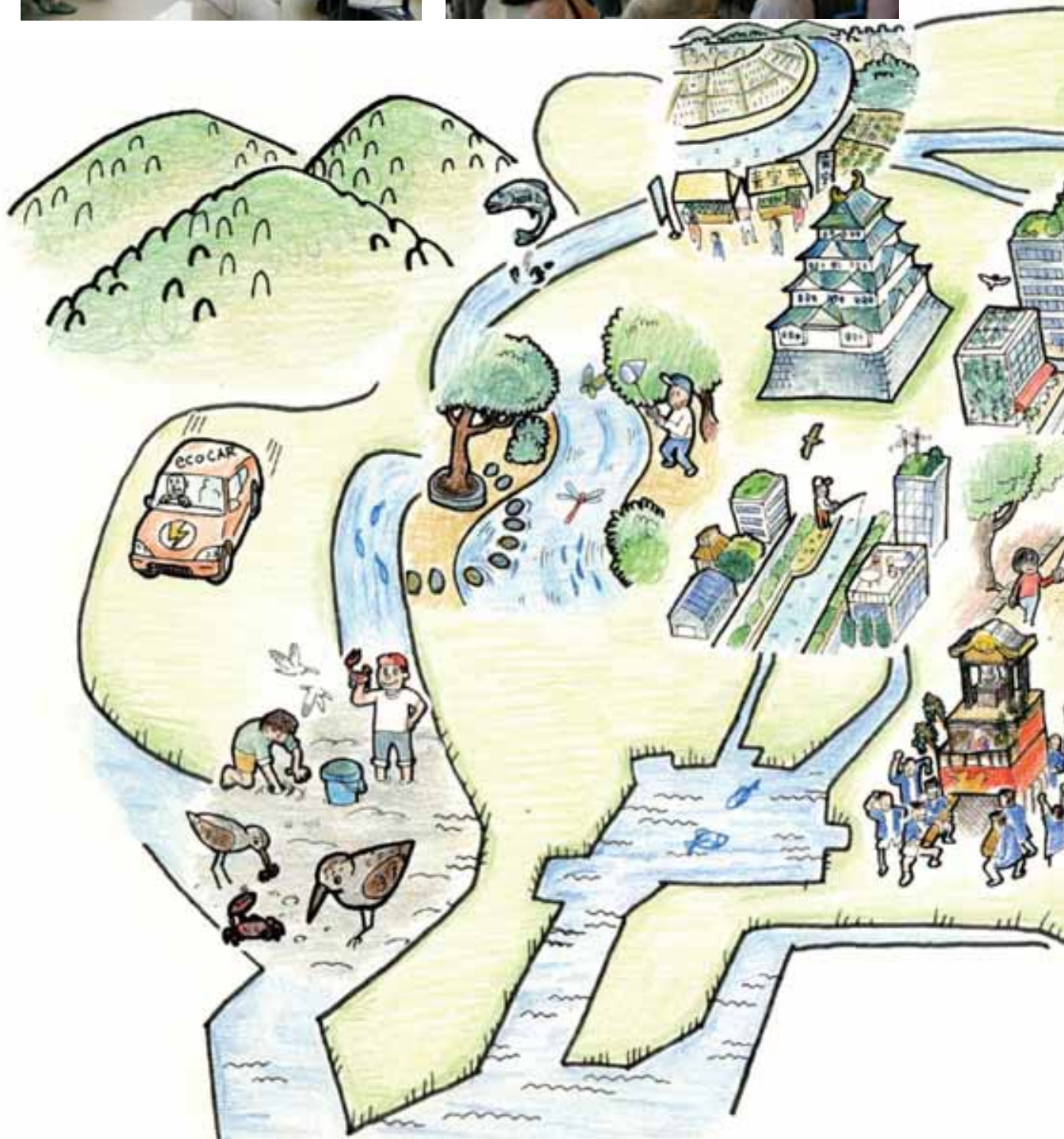


## (2) 100年後のなごやの姿

— ●● —

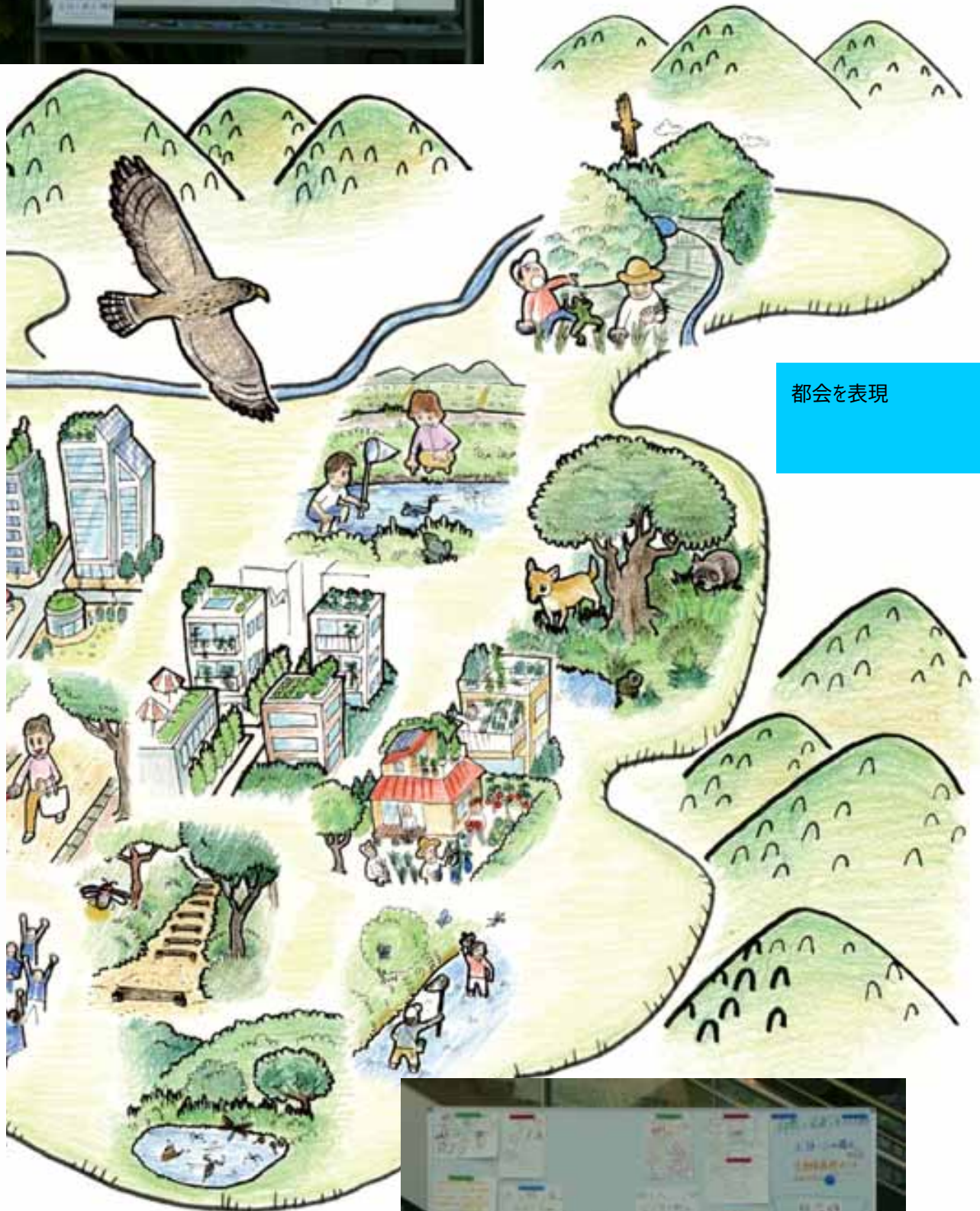
## ① 100年後のなごやの姿

—しみん検討会議で100年後の夢の姿を描いていただきました—





## (2) 100年後のなごやの姿



## コラム



### (3) 2050年に向けた3つの戦略

— 100年後の夢の姿に近づくために —

## ① 2050年に向けた「戦略」とは

— 夢の姿の実現のために、戦略を立てました —

現在のなごやの姿 2・3章をふまえて

課題  
(悪いところ)

+

特性  
(良いところ)



100年後の夢の姿

100年後、こんななごやだったらいいよね

でも、今のなごやは・・・

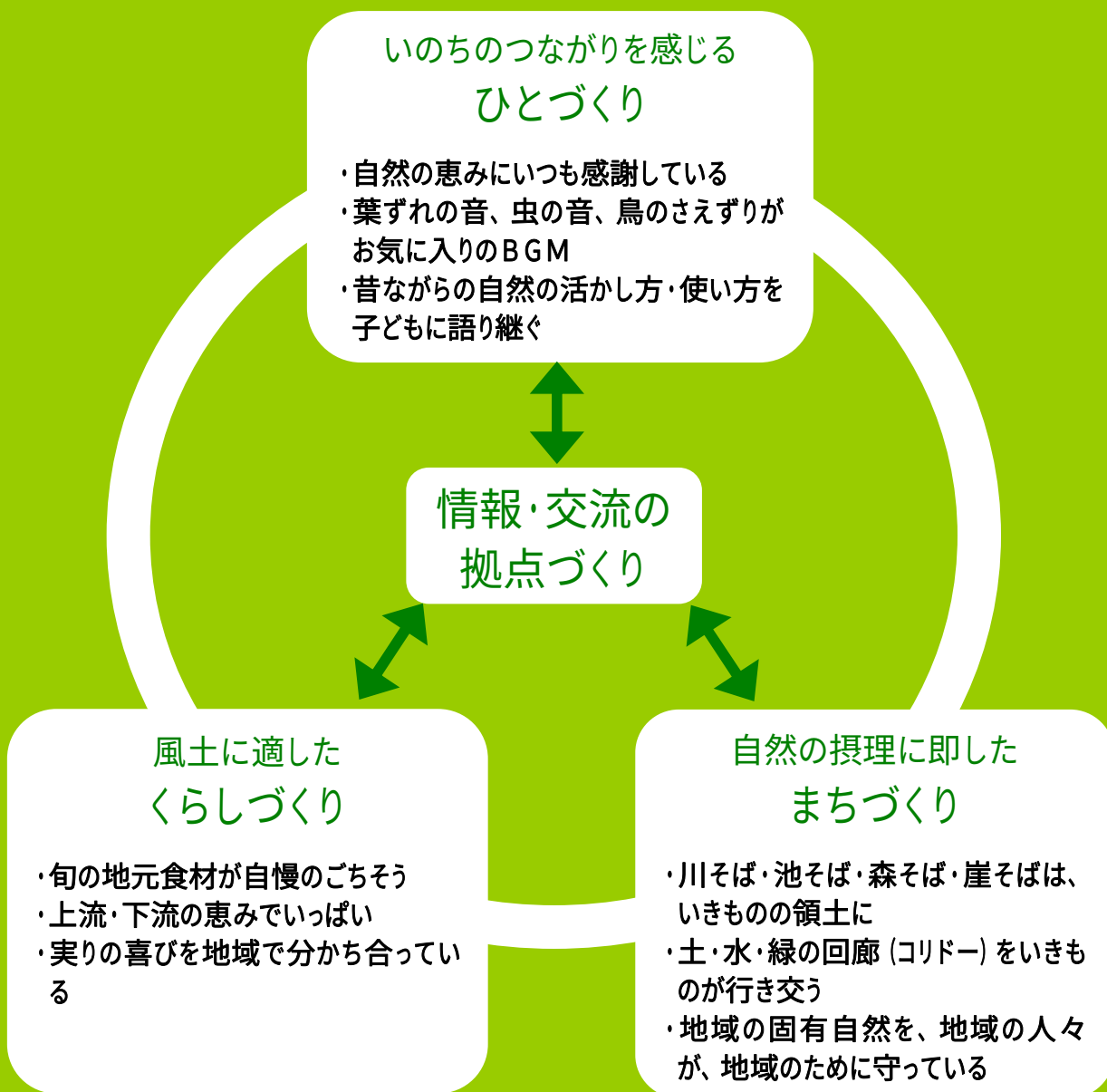
少しでも  
近づくために

### 生物多様性なごや戦略

— 実現のための3つの戦略 —

- いのちのつながりを感じるひとづくり
- 風土に適したくらしづくり
- 自然の摂理に即したまちづくり

## 2050年に向けた3つの戦略

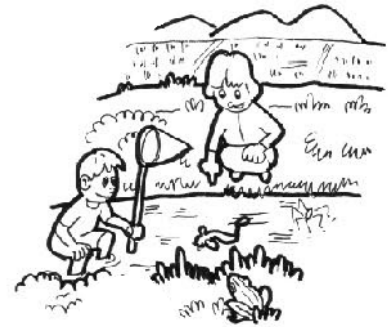


# 戦略1：いのちのつながりを感じるひとづくり

## 2050年のなごやのひとは・・・

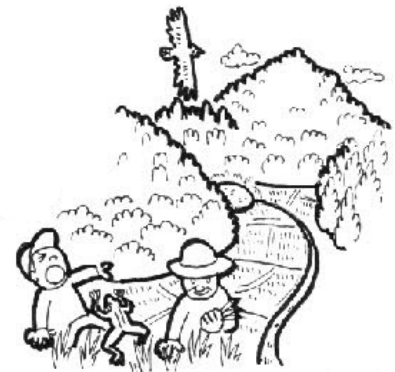
### ◎自然の恵みにいつも感謝している

- ・自然を楽しみ、自然に価値が見出されている
- ・たくさんの市民が、生物多様性を保全することの意義を知っている



### ◎葉ずれの音、虫の音、鳥のさえずりがお気に入りのBGM

- ・たくさんの市民が、生きものと共に暮らすことを喜びに感じている
- ・身近な自然に目も向けることが当たり前で、自然環境を保全する行動も伴っている
- ・生きものが大好きな子どもたちがたくさんいる



### ◎昔ながらの自然の活かし方・使い方を子どもに語り継ぐ

- ・生物多様性を知っている子どもたちがたくさんいる
- ・たくさんの市民が、なごやの土地の豊かさと文化を知っている
- ・たくさんの市民が、日本の歴史・伝統文化・自然観に立脚して、人と自然の関係、人と人との関係を考えている
- ・たくさんの市民が、100年前の環境の豊かさと現在の利便性とのバランスを考えて、100年後に向けて何を取り戻せて、何を残し、何をあきらめるのか考えている



## そのために取り組むこと

### ◎担い手づくり、語り部づくり

- ・学校教育で、生物のつながりを教える
- ・環境教育が生業として成立し、環境教育に投資できる仕組みをつくる
- ・自然体験を増やす
- ・農業の担い手を育成する

### ◎家庭・学校・地域での学び場の展開

- ・町内会に木育塾（寺子屋）をつくり、森づくりや昔の生活を伝える
- ・野外教育センターなどを活用し、子どもたちに上流へ、山の中へ行ってもらい、山づくりや水づくりを体験させる

### ◎人と場をつなぐ仕組みづくり

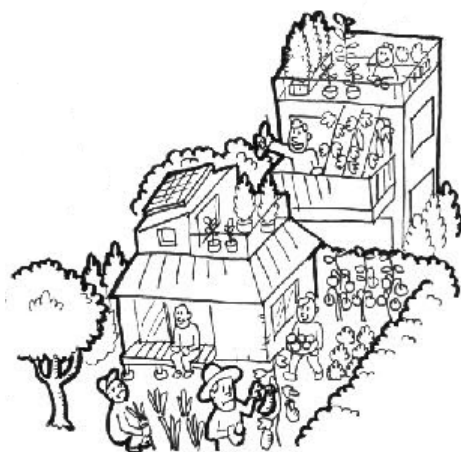
- ・専門的にせず、文化人の力を借りてアーティスティックなムーブメントにする
- ・町内会や学区など自治会で（簡単な）生物多様性戦略を立て、すべての大人が責任を持って取り組むべき課題であることを伝える
- ・自然の多様性を価値と考える文化を育成する、そこにお金が払われる
- ・予算を与えて計画・事業までやっていける強力なNPOを育成する
- ・なごやのような都市にも様々な生きものがあることを、ちっぽけでもいいので繰り返し伝え、その価値を伝える

## 戦略2：風土に適したくらしづくり

2050年のなごやのくらしは・・・

### ◎旬の地元食材が自慢のごちそう

- ・家庭で野菜を育てている
- ・生産地のことを考えた旬の食材を買っている



### ◎上流・下流の恵みでいっぱい

- ・なごや州（流域圏）で自然の恵みが循環している
- ・森・里・海がつながり、持続可能な奥山の林業、里山の農業、里海の漁業が営まれている

### ◎実りの喜びを地域で分かち合っている

- ・自然が身近にあり、それを楽しむコミュニティが形成されている
- ・自然風土、文化財を楽しめる・味わえる社会が形成されている
- ・日本で一番粋なお月見をやっているなど、日本らしい季節・暦・文化の行事・祭りが活発で、なごやに行くとそういう風情が味わえると評判になっている



## そのために取り組むこと

### ◎食べものの選び方を変える

- ・生物多様性配慮マークづくり

### ◎ものづくりの資材調達を変える

- ・山づくりへの協力
- ・木使い運動：流域の様々な木を使って家を建てる、公共施設はすべて木造とする
- ・流域連携を密にし、流域をひとつの単位とする

### ◎季節感や伝統文化を大切にする

- ・三世代が同居する暮らし
- ・アーティストの力を借りて、なごやを新しい里山文化のまちにする

## 戦略3：自然の摂理に即したまちづくり

2050年のなごやのまちは・・・

### ◎川そば・池そば・森そば・崖そばは、いきものの領土に

- ・都心では街路樹の陰でオープンカフェ、郊外では豊かな自然の中で森林浴やハイキングができる
- ・豊かな自然の中に都市がある
- ・土地や資源の利用が工夫され、「自然」に責任を持った都市
- ・街なかには堀川のような水路があっても、郊外には自然再生された庄内川が流れている
- ・国際貿易を前提としたコンパクトインターナショナルシティ



### ◎土・水・緑の回廊（コリドー）をいきものが行き交う

- ・瀬戸の山から半田まで、なごやの東部を通って森が連続し、キツネが移動している（100年後？）
- ・質の高い緑がつながっている
- ・20年後にはハッチョウトンボ、40年後には両生類・は虫類、100年後にはフクロウがみられる



### ◎地域の固有自然を、地域の人々が、地域のために守っている

- ・東山の森がブローニュの森のように有名になっている



## そのために取り組むこと

### ◎都市生活の集中化と空地の提供

- ・駅のそばに土地利用を再集約させ高密度に利用し、空いたスペースを自然再生する
- ・開発、ものづくりをペースダウンする
- ・壊すべきものは壊して自然に戻し、今ある使えるものを使う
- ・人口が減少し、高齢化する都市に見合った施策
- ・土地の付加価値を向上させる(税制見直しなど)
- ・技術力と環境保全、持続可能な利用を両立
- ・生物多様性を軸にした新しい条例づくり

### ◎生きものたちの拠点とネットワークづくり

- ・守るべき自然、保全すべき自然のゾーニングを明確に行う

### ◎なごやらしい自然(多様性と固有性)の確保

- ・なごや全体を画一的に考えるのではなく、地域の特性に応じた自然の保全と再生を行う
- ・日本や世界の各都市となごやが連携をとり、新たな自立と、共生する文明を創造する

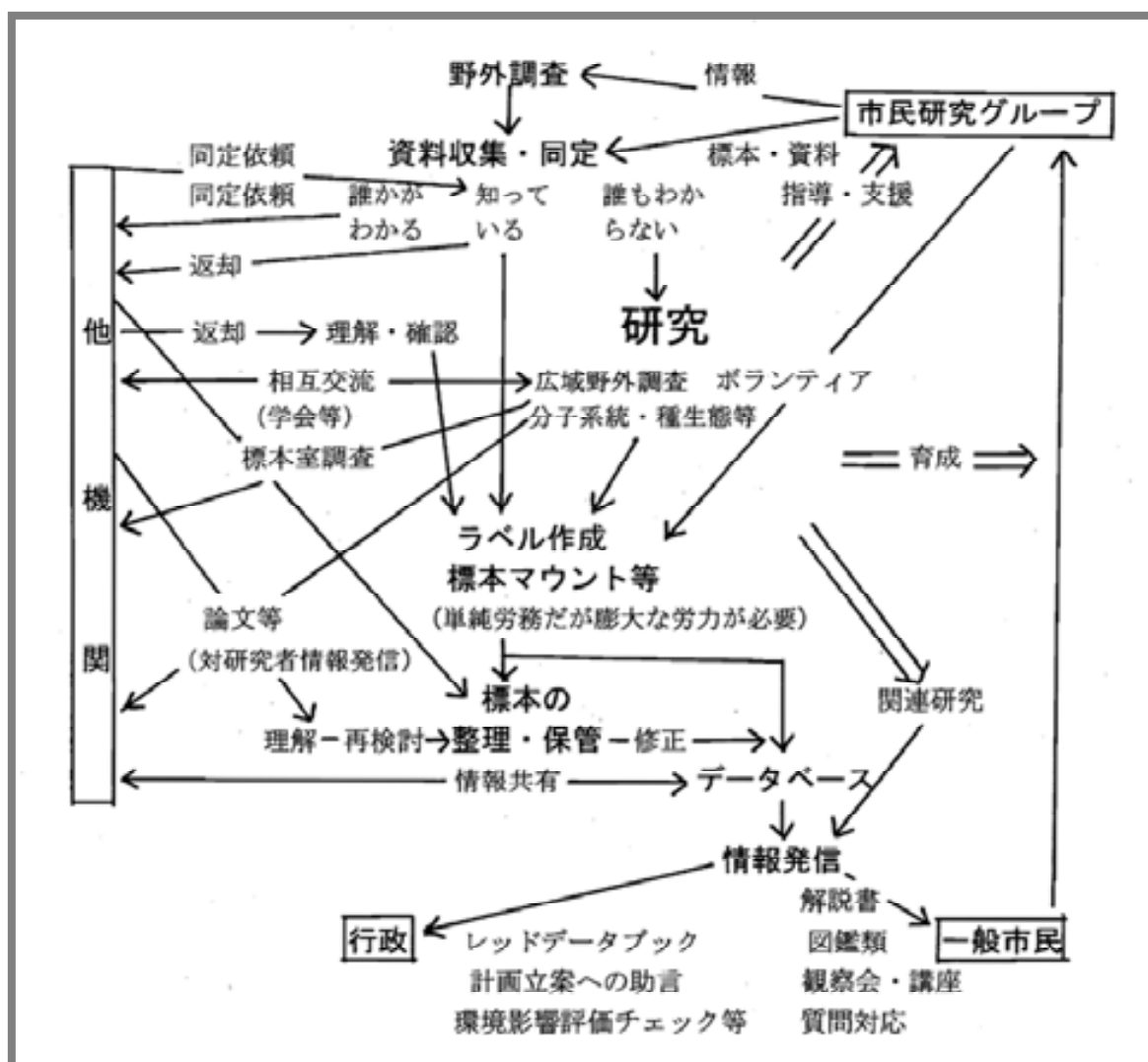
## ② すべてをつなぐ拠点づくり

## 2050年のイメージ

- ・2050年のなごやを中心とした流域圏には、「調査・収集・研究・保管・発信」の拠点がある。
- ・市民・活動家・研究者・行政などは、そこを拠点として、「ひとづくり」「くらしづくり」「まちづくり」を展開している。

## 拠点で確立すべき体系

(芹沢委員提供)



ひとづくり

くらしづくり

まちづくり

## そのために取り組むこと

◎今、さしあたり必要な取り組み

◎なぜ、拠点が必要なのか

◎将来を見すえて検討していくべきこと

◎市民・大学・企業・行政の役割

# 第5章

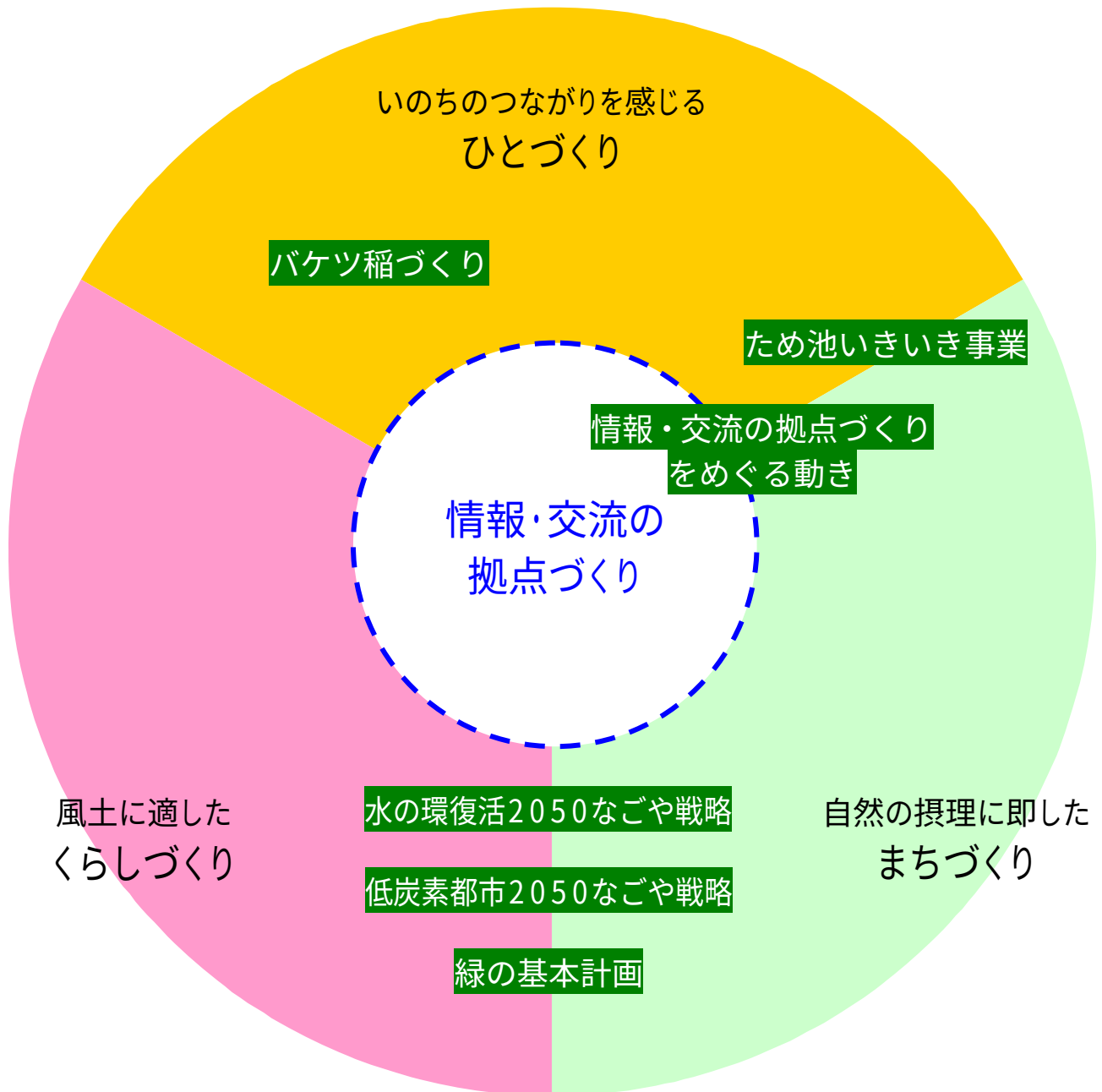
## もう、始まっています

### 実践編

— 戦略の達成に向けた5つの動き —



## 戦略の達成に向けた動き



# (1) 身近な自然の保全・再生につながる動き

〇〇

3つの戦略との関わり：まちづくり

目的

・

活動の概要

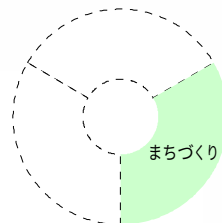
○活動期間

○活動主体

○活動概要

・

・



〇〇

3つの戦略との関わり：まちづくり

目的

・

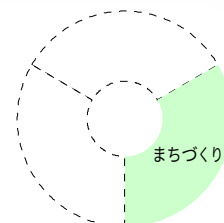
活動の概要

○活動期間：～年度

○活動主体

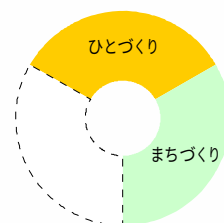
○活動概要

・



〇〇

3つの戦略との関わり：まちづくり、ひとづくり



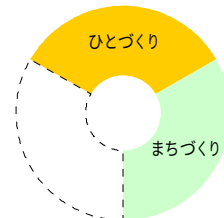
## (2) 持続可能な利用につながる動き

### 地域の動き

3つの戦略との関わり：まちづくり、ひとづくり

枇杷島学区の朝市

貴船学区の取り組み



## 伝統文化の活用：伝統野菜

3つの戦略との関わり：まちづくり、ひとづくり

目的

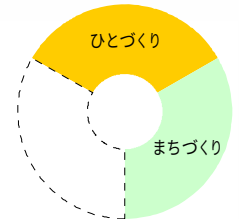
・

活動の概要

○活動主体

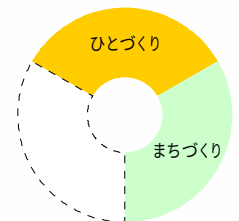
○活動概要

・



## 流域連携

3つの戦略との関わり：まちづくり、ひとづくり





## (3) 普及啓発と環境教育につながる動き

### バケツ稲づくり

3つの戦略との関わり：ひとづくり

#### 目的

- ・ 稲が太陽・土・水などの自然の恵みを受けて実ることを五感で学んでもらう。
- ・ 生物資源である食べ物への感謝の気持ちを育てる。
- ・ 我々の暮らしが生物多様性の恩恵で成り立つことを実感してもらう。

#### 活動の概要

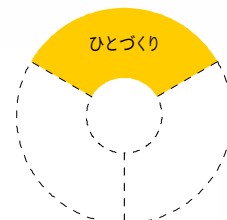
##### ○活動主体

名古屋市環境局環境都市推進部生物多様性企画室

JA愛知中央会農政営農部（協力）・社団法人名古屋建設業協会（協力）

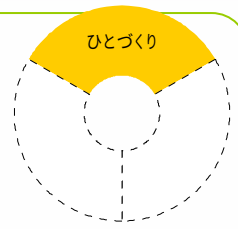
##### ○活動概要

- ・ 市内の1250人の園児を対象にバケツで稲づくりを体験してもらう。
- ・ 田んぼの生きものに着目した稲作りを推進する講師を向かえ、園児や保護者、教員への講習会を開き、さまざまな生きものの恵みにより食べ物が成り立っていることを理解してもらう。
- ・ 園児たちの取り組みを広く市民に広報することにより、生物多様性への理解のきっかけとする。



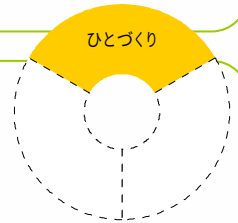
学校教育での取り組み

3つの戦略との関わり：ひとづくり



〇〇〇

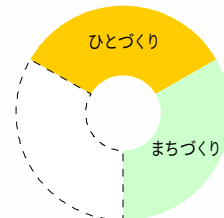
3つの戦略との関わり：ひとづくり



## (4) 情報・交流の拠点づくりにつながる動き

情報・交流の拠点づくりをめぐる動き

3つの戦略との関わり：まちづくり、ひとづくり



市民からの設立要望

○経緯

○要望の概要

関係機関の動き

○

○

○○○○○

○

○

ひとづくり

まちづくり

## ため池いきいき事業

3つの戦略との関わり：まちづくり、ひとづくり

## 目的

- ・外来生物の除去による対象地域の生物多様性の向上
- ・市民を対象とした普及啓発活動による生物多様性の保全意識の向上

## 活動の概要

## ○活動期間

平成20年度～平成22年度

## ○活動主体

名古屋ため池生物多様性保全協議会

(八事学区連絡協議会、隼人池を美しくする会、  
名古屋ため池調査実行委員会、なごやの森づくり  
パートナーシップ連絡会、なごや環境大学実行  
委員会、名古屋市)

## ○活動概要

- ・市内の主要なため池を対象に、水質・生物調査を行い、現状を把握
- ・モデルため池を対象に、池干しの実施とその効果の確認
- ・名古屋市における総合的な生物多様性の保全・再生方法を市民を交えて検討
- ・生物多様性体験学習プログラムを開発・実践し、市民の生物多様性への理解を深める



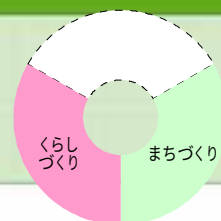
〇〇

3つの戦略との関わり：まちづくり、ひとづくり

ひとづくり

まちづくり

## (5) 行政の動き



### 環境戦略と緑の基本計画

3つの戦略との関わり：まちづくり、くらしづくり

現在、名古屋市では、この「生物多様性なごや戦略」以外に、2つの環境戦略と1つの基本計画の検討を進めています。

### 水の環復活2050なごや戦略

ねらい：水循環の健全化 目標年次：2050年

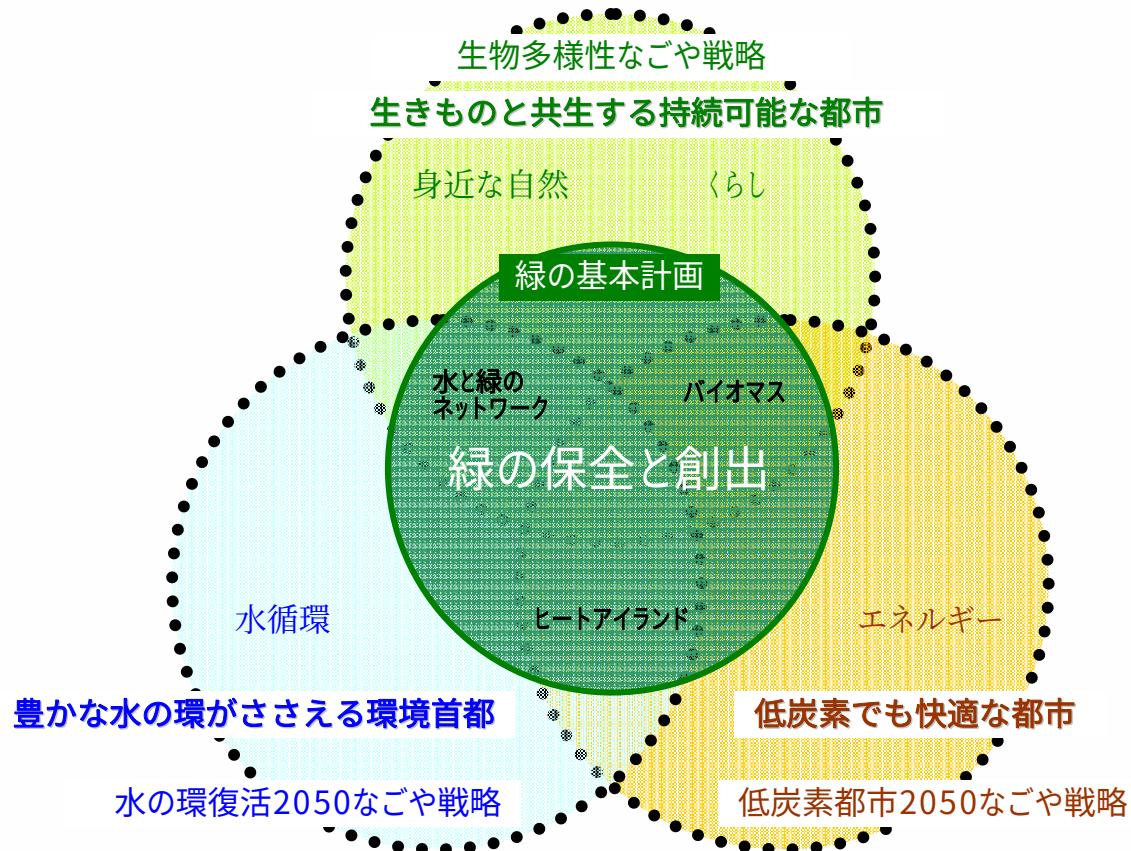
### 低炭素都市2050なごや戦略

ねらい：低炭素社会の実現 目標年次：2050年

### 緑の基本計画

ねらい：緑の保全と創出

連携でめざす日本の風土を活かした環境都市なごや





### 水の復活2050なごや戦略

現在作成中

### 低炭素都市2050なごや戦略

現在作成中

### 緑の基本計画

現在作成中